
悦楽の儀式

香住景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悦楽の儀式

【Nコード】

N9846T

【作者名】

香住景

【あらすじ】

娘を殺した犯人を突き止めてください 依頼主の娘は腹を切り裂かれ、変わり果てた姿で発見された。それを皮切りに、凄惨な殺人が次々と起こり始める。私立探偵・榎尾冬也による衛藤家連続殺人事件簿。

0・プロローグ

人間の内臓を初めて掴んだ時の感触は、とても柔らかくて、温かくて。

あれは、今思い起こしても身震いがする。

腹の底から熱いものがじわじわと全身に広がって、動悸がする。息が荒くなる。頭の芯がぼやけて、白くなって、何が何だか分からない。無性に笑いが込み上げてくる。

あの瞬間、とてつもないエクスタシーを感じた。セックスなんて比じゃない。それ以上の快樂だ。

おまけにまだ温もりを持っていた死体は、日頃その美貌を振り撒いて周囲から持て囃されていた女。けれどももう二度と動くことのない彼女は、唇が苦しげに歪み目も上向き、見るも無惨な顔となっていた。

だがそんな醜態すらも、愛おしく感じた。むしろ生きている時より、ずっと、ずっと美しい。

自らの手で切り裂いた死体の腹部から、腸を握り締め自慰をした。何度も何度も、気の済むまで。生きていた中で最も恍惚とした時間だった。

ああ！ あのとときの言い知れぬ悦びといたら！ あれは凡庸に生きていたんじゃ決して味わうことのできない感動。もしも一度体験できるのであれば、どんなことでもしよう。何もかも全てをかなくり捨てたって構わない。あの行為以上に心が動かされるものは、きつともうこの世にはない。

そうだ、もう一度だけ。もう一度だけ、あの快感を。大丈夫。うまくやれば、バレやしない。あれだけの大仕事をやり遂げたんだから、大丈夫だ。次だって、簡単なことじゃないか。

1・依頼

榎尾冬也という男は普段、驚くほどずぼらで暗いやつだ。まず、よく生活できるなと思うほど事務所が汚い。書類や何かよく分からないオブリエのようなもの、ゴミ、その他諸々が床に散乱していて足の踏み場がない。

私がたまにやって来ては掃除をしてやるが、次の日には全て元通りだ。榎尾曰く、散らかっている状態がすでに片付いているんだから余計なことはするな、ということらしい。私には全く理解できない言い分だ。

私と榎尾は、ある事件をきっかけに知り合った。現場での彼は、それはそれは積極的に動き回るしよく喋る。警察などお構いなしに様々な事件を解決してきたのを、私は何度も見た。

しかし一步自宅に戻ると、彼は途端に静かになる。私という話相手がいれば多少会話もするが、現場にいるときのような活発さ（…）と言えば聞こえはいいが、奇行が目立つただの変人だ）はなりを潜めてしまう。

榎尾はあの黒いスーツ、黒いネクタイに毛髪をきっちりセットした状態でないと、気分が乗らないらしい。

彼の仕事に私がついて行くことも、しばしばある。一応、榎尾の助手という名目でついて行くが、本来の理由はただの好奇心だ。けれど殺人事件の捜査なんてものは滅多になく、彼の仕事を大きく占めるのは人探しとか浮気調査とか、興信所紛いのものが多い。今も彼は、書類が散乱したデスクに向かって、依頼されたある人物の調査を行っているところだ。

「最近大きな事件がないね」

デスクにへばり付いている彼に声をかける。私はここに来てから、もう二時間も放置をくらっていた。

ジャージ姿の榎尾は、頭を掻きながら上目に私を見ると「うん」

と唸るように返事をして、また書類に釘付けになる。

「事件はあるさ。毎日起きてる。大小に関わらずね」

「でも君んところには依頼がさっぱりこない。最近解決した女兒連続誘拐事件だって、もう四ヶ月も前だ」

「七瀬さんが仕事を持ってきてくれないからなあ。直接被害者が依頼しにくることなんて、滅多にないし」 七瀬とは、神奈川県警の警部のことだ。榎尾は彼の弱みを握っていて、それを秘密にしておくことと引き換えに、事件の捜査に加わらせてもらっているらしい。「また何か新しいネタで脅しをかけないといけないかな」

「怖いことを言うなよ。探偵がそんなことしていいのか？」

「仕事がないと探偵なんて名乗れない。その仕事を得るためなら、少々の無理も必要なのさ。相手は馬鹿な警察なんだから、罪悪感も感じない」

榎尾は万年筆で宙に円を描きながら、とんでもないことを言っている。その拍子にインクが書類の上へこぼれ落ちた。天罰だと笑ってやる。

私たちがそんなくだらしないやり取りをしていると、木製の扉が控え目な音でノックされた。榎尾は即座に口を閉ざすと、私に顎で出るよう示した。

読みかけていた雑誌をソファアに置いて、扉へ駆け寄る。押し開き、その来訪者を目にした途端、私は魔法にでもかけられたかのようになり、その場から動けなくなつた。

綺麗な女性だった。太陽の日を一度も浴びたことがないので、と思われるほど白い肌、きゅっと結ばれた唇はベージュの口紅で濡れていて、エロスを感じさせる。垂れ気味の目の周りを覆う黒々とした睫毛は、誇らしげに上向いていた。胸元で緩く波打っているブラウンの髪は艶やかに光っている。

40代と言われても無理のない風貌。しかし黒のタイトなワンピース

「その袖から覗く手の皺と、化粧で隠された目元の小皺が、それを頑なに拒んでいる。もしかしたら50をゆうに超えているかもしれない。若い頃はさぞ男に困らなかったことだろう。つい無粋なことを考えてしまう。」

「あの……榎尾冬也さんですか？」

「どちら様？」

後ろから榎尾の低い声が聞こえた。彼女は私の肩越しに榎尾を見遣ると、軽く会釈をした。

「衛藤暁美と申します。榎尾さんに依頼したいことがありまして」

「どういったご依頼で？」

暁美は一瞬戸惑った表情を見せた。唇が微かに震えている。

「私の……娘を殺した犯人を、突き止めてほしいのです」

「がしゃん、と大きな音が響いた。振り向くと榎尾が慌てた様子でクローゼットからスーツを取り出し、風呂場へ走っているところだった。卓上のインクの瓶が倒れている。さっきまで何やら認めていた書類が黒く染まっているのを見て、私は小さく息を吐いた。」

「とりあえず依頼主を事務所へ通すと、先ほどまで私が座っていた、辛うじてスペースのあるソファアームを勧めた。」

「少々お待ち頂けますか。すぐ榎尾が参りますので。何か飲み物を

……」

「いえ！……あの、どうぞお構いなく」

緊張しているのだろうか。必要以上に大きな声を出されて、私はまた固まってしまう。「はい」と情けなく応えようと、彼女の向かいのソファアームへ腰掛けた。

ほどなくして、着替えを終えた榎尾がやってくる。ネクタイが曲がっているのに気づいていないらしい。

「お待たせしました。では詳しくお話を伺いましょうか」

私の横に腰掛けた榎尾は、言いながら足を組んで胡散臭い笑みを浮かべた。彼女がくる前とは態度がまるで違うが、この変貌ぶりにももつ慣れてしまった。

暁美は小さく頷くと、消え入りそうな声でゆっくりと話始めた。

「娘が殺されたのは、今から一週間前の、4月16日です。お腹を滅多刺しにされていて……。家政婦さんが発見したんです。自室で殺されているのを。彼女の悲鳴が聞こえて、私も駆けつけたんですが……娘は、変わり果てた姿になっていました」

その時の情景を思い出したのだろうか。暁美の白い肌が一層青白くなった。瞳が僅かに潤んでいる。

「警察には？」

「もちろん通報しました。でも、何と言いますか……警察は頼りないのです。一刻も早く犯人を捕まえていただかないと、不安で不安で……。家にいたつても休まりません。またいつ誰が殺されるかも分からないのに。そこで、知人から榎尾さんを紹介されまして数々の実績をお持ちの方と伺っております」

「買い被りすぎですよ。まあ引き受けた事件を全て解決していることは確かですが」

榎尾は軽く受け流したが、私には彼が嬉しげなのが手にとるように分かった。

榎尾を頼もしげに見つめていた暁美は、上体を前のめりにすると、絶るように懇願した。

「お願いです。どうかお受けしていただけないでしょうか。お礼は榎尾さんのご希望される金額を、ちゃんとお支払いいたします」

榎尾はこれにはあまり反応を示さなかった。いつだったか、金に對して執着が湧かないと言っていたことを思い出す。そんなことから、いつまでも事務所で生活するような貧乏探偵のままなのだろう。

「金のことは事件が解決してからもお話ししましょう。僕はとにかく早く推理に取り掛かりたい！ なんせ殺人事件を手掛けるのだから、さあ、だからといって推理力が衰えているなんてことはありませんので、ご安心を。さて、しかし謎を解くには貴女様だけの証言では不十分です。なので今はこれ以上詳しくお聞

きしません。とにかくすぐにもそちらのお宅へ伺って、僕が隅々まで引つ掻き回すことになりませんが」

「構いません。家の者は皆、榎尾さんを歓迎しております。お部屋も用意しておりますので、是非お泊りいただいで、捜査を」

「それはそれは。こちらも通う手間が省けて何よりだ。ああ、成沢くん。君も時間があるなら来るかい？」

ちら、と暁美に視線を遣ると、まだ青さの抜けない顔で力無く微笑み頷かれた。私などついて行っても毎回の足しにもならないのだが、幸い仕事も昨日目処が立ったばかりだ。私は榎尾と暁美の了解を得て、探偵の助手を務めることに決めた。

2・衛藤家の人々

舞台は屋敷と呼ぶのに相応しい大きな洋館だった。私の背より遙かに高い柵が外部から家屋を守るかのように、ぐるりと周りを囲っている。他にも金持ちが住んでいそうな上品な一軒家が多く立ち並んでいるが、その中でも衛藤家は広大さ、品性ともに群を抜いていた。門を潜ると玄関へと5メートルほどの石畳が続いている。左右に広がる手入れの行き届いた庭園を眺めながら、私と榎尾は暁美に続いた。

「お帰りなさいませ、奥様」

重厚そうな扉から玄関へ入ると、小柄な老女が私たちを迎えてくれた。柔らかな物腰でお辞儀をされ、客であるこちらもついつられて頭を下げる。

顔を上げたついでに、失礼にならないよう目だけで辺りを見回す。玄関だけでも1部屋作れそうな広さだ。高い天井にはシャンデリアが淡い光を放っている。正面奥には2階へ続く階段が緩いカーブを描きながら続いていた。床には緋色のカーペットが敷かれており、そのあまりの豪勢さに私は早くも圧倒された。

「榎尾さん、こちらは住み込みで雇っている家政婦の吉野キクさんです。吉野さん、こちらは……」

「どうも初めまして！ 探偵の榎尾冬也と申します。あ、これ名刺。貴女が憐れなご遺体の第一発見者と伺っておりますが」

「え……ええ」

「では早速、当時の状況を詳しく説明してもらいましょう。さ、現場へ案内していただけますか」

榎尾は衛藤家に足を踏み入れるなり、初対面の挨拶もそこそこに狼狽している老人を促して我が物顔で上がり込んでしまう。なんて厚顔無知な男だろう。

私はその様子を、暁美と一緒にあって玄関先で呆然と見ていたが、

やがて榎尾に名を呼ばれ、暁美に一礼してから小走りに彼の後を追った。

2階へ上がってすぐ右手の扉の前まで来ると、キクは一呼吸終えてからゆっくりと扉を開く。

明かりをつけてまず目に飛び込んで来たのはグランドピアノ。部屋のほぼ中央に鎮座しているそれは、黒々と鈍い光を反射していた。入って右の壁には小振りのデスク、本棚、ベッドが奥に向かって順に並んでいる。その木製の古めかしい本棚には児童書と楽譜が殆どを占めており、あとはハードカバーの小説や辞書が綺麗に収まっていた。当然ながら私の著書は見当たらない。

「華織さんは、このピアノの上に横たわっていました。16日の0時から1時の間に殺されたと……警察の方が漏らしているのを聞きました」

キクは震える手で、ピアノを指し示す。榎尾はそれに近寄ると蓋を開けたり、しゃがみ込んで裏を覗いたりしていたが「警察が入ったあとだから何も残っちゃいないか」と口をへの字に曲げてぼやいた。

「その殺された暁美さんの娘……華織さんですか。生きている彼女を最後に見たのはいつでした？」

「15日の……夜8時だったかしら。お仕事から帰って来られると、すぐまた外出されました」

「行き先は聞いてませんか？」

「ええ……。華織さんは最近夜に外出することが多かったのですが、行き先は一度も聞いたことがありません。旦那様は男のところへ行ってるんじゃないか、とおっしゃっていましたが」

「とすると、恋人がいたということでしょうか」

私が口を挟むとキクは困惑した様子で「さあ……私はそういったことは全く……」とだけ呟いた。

「それで、華織さんが部屋へ戻るところは見なかったのですか？」

「はい。15日は夜10時頃まで起きていましたが、見掛けません

でした。朝、食事の支度をする前に玄関周りのお掃除をしたのですが、華織さんの靴が足りないことに気がつきまして、きっと外出先から直接お仕事へ行かれるのだろうと思いました。最近はそのようなことが、度々ありましたから」

「お仕事は何をなさっていたんですか」

「保育士を」

「ああ、なるほど、それで」

「何か合点がいくことがあったかい、ワトソンくん」

ニヤけ顔で榎尾が茶化す。少々気分を害した私は、黙ったまま本棚を指差した。

榎尾は横目で本棚を確認しただけで、そんなことは事件に関係ないとも言いたげに、すぐまた吉野へ向き直る。

「……ですが朝9時頃に幼稚園からお電話がありました、華織さんが出勤していないというのです。それで私、華織さんの部屋を覗いてみました。そうしたら、そこに華織さんが……」

話を聞いた後だと、ピアノ自体が何だか禍々しいものに見えてくる。腹を切り裂かれていたことだから、さぞ赤く染まったことだろう。血液と華織の無念を吸収したグランドピアノは、一体どんな音色を奏でるだろうか。

しかし私の妄想はキクの言葉で意図も簡単に砕かれた。

「……華織さんは……それはもう酷いお姿になっていましたが、お腹を切られているのに、綺麗だったんです。その、体もピアノも血に塗れていなくて」

「おや、それは不思議ですねえ。殺した後に拭き取ったのか……はたまた別の場所で殺害したのか……」

親指を噛んだまま、榎尾はピアノの前でじつと静止する。かと思ふとさつさとベッドへ歩み寄り、整えられたそれをさつと捲った。

「事件後、シーツは取り替えました？」

くるりと振り向きキクに問うが、彼女は小刻みに首を左右に振る。「この部屋は殆どあの日のままです。私は何も触っていません。一

人じゃとても恐ろしくて入れませんし……」

「発見当時、室内で変わったところはありませんでしたか？」

「なかつた……と思います。ごめんなさい、動転して……細かいところまでは確認していません」

額に手を当てる俯くキクが痛ましい。これ以上尋問を続けると倒れてしまいそうだ。

榎尾に抗議の視線を送ると、わざとらしく首を竦めてみせてから優しくキクの肩に手を置いた。

「吉野さん、ご協力ありがとうございました。そろそろこの家の方々にお話を伺いたいのですが、皆さんご在宅でしょうか」

「あ……はい、皆さん階下の客間にいらっしゃいます。どうぞ、こちらへ」

1階へ降り右手扉の向こうに通されると、既に5人の人物が待機していた。部屋には4人掛けのソファと1人掛けソファがそれぞれ2つ、テーブルを囲んで向かい合わせに配置されている。暁美の夫と思われる男と若い女性3人がソファに腰掛け、暁美は窓の側に立って裏庭を眺めていた。私達を案内するとキクは一礼してから静かに退席する。

「どちらが榎尾さん？」

「僕がそうです」

立ち上がった男の問い掛けに、榎尾は誇らしげに右手を胸に当て仰々しく頭を下げた。両脇からくすくすと控えめな笑い声。テーブルを挟んで向かい合って座っている2人の女性は、殆ど同じ仕種で笑っていた。仕種だけでなく顔も瓜二つだ。

「君がそうか。私は衛藤信敏。写真家だ。よろしく」

信敏は縦にも横にも大柄な人物で、そこに仁王のような仏頂面が加わり、必要以上の圧力を他人に与えていた。歳の割に豊富な毛髪は、もう殆どが白い。

私たちは交互に握手を交わすと信敏と女性の向かいに腰掛けた。暁美も信敏の隣に座する。

「三女の由加里。仕事は、とあるフォトグラファアの助手よ」

信敏の横からハスキーな声で由加里が名乗る。彼女は中性的な顔立ちをしていた。ワンレングス・ボブで黒い髪がミステリアスな雰囲気を実際立たせている。紺のストレッチパンツ、衿元にレースをあしらったクリーム色のブラウス、黒のリボンを首に緩く結んだ格好からはボーイッシュな印象を受けた。

由加里の言葉が終わると、待っていましたと言わんばかりに両の女性が同時に立ち上がった。榎尾に向けられた彼女らの視線は、物珍しい玩具を見るように輝いている。

「私は桜」

「私が楓」

「末っ子で双子なの」

「よろしくね、探偵さん」

右と左……桜、楓の順で交互に語りかけてくる。どちらも赤茶のロングヘアで、服装もカーディガンに赤いチェックのシャツ、白いスカートとほぼ同じで見分けがつかない。ただ、カーディガンの色だけが違う。モスグリーンが桜で、サーモンピンクが楓……私は2人の間で目を忙しく移動させた。

「では改めまして、探偵の榎尾冬也と申します。衛藤家の皆さんにとつての救世主となれるよう、尽力致します」

「まあ！」

「救世主ですって」

「ねえ、探偵さん。“えのおとうや”ってどういう字を書くの？」

榎尾はすかさず名刺を渡した。双子はその黒地に白文字の変わった名刺を受け取ると、また囁き合うように笑った。よく笑う双子だ。

一方、信敏と由加里は胡散臭そうに探偵を眺めている。彼らの反応は至って正常だ。こんなときにまでその馬鹿げた台詞を吐ける榎尾は、ある意味すごいと思う。

「榎尾さんは夏生まれかしら」

「いいえ、冬生まれよ、きつと。名前に入っているんだから間違いないわ」

双子は探偵の名前に2つの季節が入っていることを言っているのだろつ。夏と冬、正反対の季節を持つ名は確かに珍しいかもしれない。

当の榎尾にとっては幾度となく言われてきたことらしく、特に気分を害するふうでもなく、寧ろ双子の反応を楽しんでいるようだ。暫く2人に議論させてから首を左右に振ると「実は9月生まれなんですよ、夏でも冬でもなくね」と種明かしをした。

「ああ、それと。こつちの冴えない優男は僕の助手です。彼は趣味で小説なんぞも書いているんですが、大して売れてもいないし面白くもなくてね、あつはつは！ それではそろそろ本題に入りましようか」

この探偵は私のことを取ってつけたように、尚且つぞんざいに紹介すると、有無を言わず話題を変えてしまつ。

自らの名誉のために主張しておこつ。私の本業は物書きであり、決して似非救世主の助手などではないことを。

「榎尾さん、申し訳ないんだが、次女の真子と孫の早苗がまだ帰っていないくてね」

娘たちの自己紹介のときに、長女が次女がいることは察していたがその上、孫までいるとは。おまけに信敏以外は皆、女性らしい。

そんな中で暫く寝泊まりすると思つと、緊張で少しばかり身が固くなる。いや、変な気を起こすつもりはないが、何となく肩身の狭い思いがした。

「そうですね。まあ、そのお2人は帰つてこられ次第お話を聞くとして。……警察と同じ質問ばかりになることを、始めに断っておきます。面倒でしょうがなるべく正確なご説明をお願いします」

そう前置きすると、榎尾は一度咳ばらいをしてから続けた。

「15日の夜8時から16日の華織さん発見時まで、皆さん何をしていたかをお伺いしたいのですが」

これにはまず信敏が口を開いた。

「15日の夜はずつと書齋に籠っていたな。翌日早くに仕事が入っていたもんだから、支度を済ませて9時には眠ったよ。華織と最後に顔を合わせたのは15日の朝だった。それから16日の朝5時に起きて朝食を済ませた後、6時に家を出た」

「では信敏さんは、吉野さんが華織さんを見つけたときは外出中だったと？」

「そうなりますな」

「由加里さんは？」

「15日は夜10時30分頃に帰宅したわ。仕事自体は5時に終わっていたのだけれど、祐輔さんと会っていたの。……佐々木祐輔さんはお父さんのアシスタントよ。私、彼とお付き合っているんです。それで車で送ってもらって、疲れていたからすぐに寝ました。16日は仕事がお休みだったから、目覚ましもかけずにずっと寝ていたの。朝、キクさんの悲鳴で目が覚めたわ」

「では由加里さんも華織さんが外出、帰宅する姿を見ていないのですね」

「ええ」

由加里は細い足を組み替えながら答える。榎尾は顎を撫でてから、次いで双子を交互に見遣った。双子はお互い目配せをして、桜が代表して話し始めた。

「私たち、夜の9時近くに帰ってきたの。大学の講義のあとにお友達と遊んでいて。だから出かける華織姉様は見かけませんでした。眠ったのは11時くらい」

「でも私、夜中にお手洗いに行きたくて目が覚めたんですけれど、廊下で物音を聞いたわ」

桜の言に補足するように楓が言う。

榎尾はその瞬間、ここに来て初めて生き生きとした表情を見せた。大袈裟に手を打ち鳴らすと、勢いよく立ち上がって喜色満面の笑みを浮かべる。

楓も探偵の反応が嬉しかったらしく、大きな目をしばたかせながら促さずとも先を続けた。

「廊下に出て1階へ降りようとすると、微かにシャッター音が聞こえてきたんです。そのときは由加里姉様が何か撮影しているのかしらと思ったんですけど、姉様は眠ってらしたみたいなので……あの音は華織姉様の部屋からしていたのかも。華織姉様と由加里姉様のお部屋は隣同士ですし、2階でカメラを持っているのは由加里姉様だけでしたから勘違いしていましたけど」

「由加里さんの証言を信じるなら、何者かが華織さんの部屋に侵入して撮影をしていた……ということかな」

「私は嘘なんてついていません」

険のある声だった。由加里が探偵をきつく睨んでいる。

「いや、これは失礼。職業柄、他人を簡単に信用できない性質なものです。ただ、今の段階ではまだ誰が犯人だとも言えませんし、誰が犯人でないとも言えません。それは由加里さんだけでなく皆さんに当て嵌まることですよ。探偵は常に自分以外の全ての人間を疑わなければなりません」

榎尾は珍しく、真剣な態度で由加里を諭した。横から榎尾の表情を盗み見るが、何を考えているのか全く読み取れない。由加里は短く息を吐くと、ただ一言「悲しい人なのね」と言い放った。

妙な空気になってしまった。気まずい沈黙。榎尾は微動だにしないし由加里はそっぽを向いたまま。誰もかれもが言葉を発しようとしな

「あ、の……そういえば、暁美さんからまだお話を聞いていませんでしたね」

いたたまれなくなつた私は、つい暁美に話を振ってしまった。しかし宙に視線をさ迷わせた暁美は心ここにあらずだ。

「暁美さん……?」

もう一度呼びかけると、暁美はぴくりと体を揺らして、虚さの残る瞳で私を捕らえた。けれど不思議と見られている感じがしない。私の後ろずっと遠くを見ているような……私を通して一体誰を思っているのだろうか。その憂いを湛えた彼女はとて……。

馬鹿な。何を考えている。

「すみません、私の番ですか」

絡んだ視線は暁美の方から解かれた。気まずさを解消するために口を開いたのに、先ほどとはまた違った気まずさに襲われる。顔が紅潮している気がして、足元を見つめたまま、ただ暁美の言葉だけに意識を向けた。

「15日の夜は食事を済ませてから、部屋で音楽を聞いたり読書をしたりしていました。8時20分頃、華織が部屋へやってきました。出かけてくるから、と言つてあの子はさっさと行つてしまいました。が、いつもより少し……めかし込んでいたようです」

「誰に会われるか言っていますでしたか?」

「ええ、ただ出かけるとだけしか」

探偵はすっかり調子を戻していた。いや、彼のことだから由加里とのことなど本気で気にしていないだろう。黙っていたのも、きつと自分の考えに耽っていたに違いない。

由加里のほうはすっかり不機嫌な様子だったが。依頼者の1人と早くもこんな険悪ムードで大丈夫だろうか。

不意に由加里の隣、衛藤信敏に目が行く。彼はでっぴりとした体を深々とソファーに預けて、榎尾を眺めている。その鋭い目は、探偵が信頼に足る人間か見極めようとしているようだった。

「それで君、何か分かったかね」

厳しい声で信敏が榎尾に意見を求める。

登場人物の証言は2名を除いてほぼ出揃った。犯人を特定できるほどの決定的な情報はなかったが。あまり簡単な事件ではなさそうだ。

どこか一点を見つめて思索していた榎尾は、やがて膝を叩いて背筋を伸ばした。

「今のところ、華織さんが15日の夜に誰と会っていたかが気になりますね。彼女には恋人がいましたか？」

「いたみたいですよ」

桜が内緒話でもするかのように、右手を口元に添えて囁いた。

「でも誰かは知らないの。しつこく尋ねたことがあるけれど、華織姉様は何にも教えてくれなかったわ」

「他の皆さんは、何か聞いていませんでしたか？」

桜の言葉を否定する者も肯定する者もいなかった。楓も桜と同じ情報を得ているようで、楽しそうに微笑んでいる。若い女性はいつだってこうした恋愛話が好物らしい。

「分かりました。今のところ、僕からこれ以上質問することはありません。僕はこれから華織さんの部屋に籠ります。何か思い出したり、ご用のある方はいらしてください。行こう、成沢くん」

立ち上がって皆を見渡しそれだけ言うと、榎尾は足早に客間を後にする。置いて行かれぬよう「失礼します」とだけ言い残して、私も彼の後を追った。

「正直に言おう。警察の手垢がついた現場なんて、真剣に見る気がしないね」

華織の部屋に入るなり、榎尾は大声でそんなことを言う。華織のベッドに倒れるように横たわる榎尾を睨みながら、私は慌てて扉を閉めた。

「馬鹿、聞かれるだろ」

「別に構わないさ。全く、何だって事件から一週間も経ってから探偵を雇うんだらう。久々の殺人事件だからって浮かれて引き受けたのは間違いだっただけかなあ」

とんでもないことを言う奴だ。まさか中途半端に首を突っ込んで

おいて、やっぱりやめた、なんて言い出すんじゃないだろうか。この気分屋なら大いに有り得る。

「暁美が言っていたじゃないか。警察は頼りないって」

「頼りないんならもつと早くに依頼すべきだね。一週間も犯人に猶予を与えていたら、僕ならさっさと雲隠れする」

「じゃあ君は、もう犯人はどこかへ身を隠したっていうのか？」

「犯人が衛藤家以外の人間ならね。普通に考えたら、華織が15日の夜に逢瀬を交わっていた人間が怪しい。それに楓が言っていた、シャッターの音も気になる。この家でカメラを持っているのは今のところ信敏と由加里だが、彼らに華織殺害は無理だ」

「信敏は」

私は先ほどの信敏の証言を思い出していた。彼はずっと一人で書斎にいて9時には床に就いたと言っていたが、これは十分なアリバイとは言えない。夜中にこっそりと華織を殺しに行くことは可能だ。それを言うつと榎尾は呆れ顔で溜め息をついた。

「何を言うかと思えば。華織は8時に帰ってきてすぐ出ていったんだよ。それで殺されたのは0時から1時の間だ。君は信敏が華織を尾行して行つて逢瀬を終えるのを待つて、帰り道で殺害したとでも言うのか」

「有り得ない話ではない」

「どうだか。尾行の途中で華織に見つかる可能性があるのに、そんな危ない橋を渡るとは思えないな」

我ながらなかなかの推理だと思つたんだが、探偵のお気に召さなかつたらしい。あしらうように手をぱたぱたと振ると、そのまま目を閉じてしまった。こんなところで寝るつもりだろうか。死体があったのはピアノの上だが、よくもまあ殺された被害者の部屋で寛げるものだ。

手持ち無沙汰になつてしまった私は、本棚から一冊の絵本を取り出してベッドに横たわる榎尾の足元に腰かけた。絵本のタイトルは「いのちの おすそわけ」、著者は青葉りょう。病気の母の見舞い

のために病院へ通う男の子が、母と同じ病室の病人たちに自分の寿命を分け与えるという話だ。

絵は淡い色の水彩絵の具を使った優しいタッチで、人への親切を描いた内容ではあるが、自分の命を削ってまで誰かのために犠牲になるといふのは、なかなか残酷な気がする。この本を読み聞かせたらトラウマになる子どもは間違いなくいるだろう。

私は幼少の頃、親が読み聞かせてくれた「青い鳥」を思い出した。内容は思い出せないし未だに知らないままだが、何かとても恐ろしく感じた記憶がある。子どもの頃のトラウマは意外と大人になっても尾を引いているものだ。

「そういえば、僕は君が熟女好きだとは知らなかったな」

「何のことだ？」

寝ていると思っていた榎尾が藪から棒に訳の分からないことを言い出す。彼は何やら下卑た笑みを浮かべていた。私は特に熟女が好きというわけではないのだが。

「確かに彼女は綺麗だ、あの歳にしては若く見える。でも旦那の前であんなに見つめ合うのはどうかと思うな。いや、恋愛の形は人それぞれ。僕は不倫関係を否定はしないが、軽蔑はするね」

「もしかして暁美のことか」

彼は客間でのことを言っているのだと、そこでやっと気がついた。心外だ、それはお前の勘違いだ、と言っただけで済まればいいのに、なぜか言葉がすぐに出てこない。舌が纏れる。

何度か口をもごもごと動かしてから「いや……」と曖昧な返答しかできなかった。私は自分に絶望した。

暁美に対して恋愛感情を抱いているわけではない。これは確かだ。しかし彼女から、中年女性に似つかわしくないエロスを感じていることも否定できない。初めて彼女を目にしたときから、私はそれを本能的に感じとっている。

「君も隅に置けないね」

喉を鳴らして笑う失礼な男の足に、拳を入れてやる。するとタガ

が外れたかのように大笑いし始めた。怒りと恥辱で顔面に血が集まるのが分かった。こんなくだらないことで、無駄に観察力を発揮しないでもらいたいものだ。

いつまでも笑い転げている榎尾に冷たい視線を送っていると、私たちが諫めるかのように突然ドアを強くノックされた。

反射的に素早く立ち上がる。榎尾はまだひいひい言っているが、さすがにベッドから体を起こした。

「随分と楽しそうな声が聞こえてますけれど、もう犯人は分かっただのかしら？」

私の手がノブにかかる直前、扉が勢い良く開いた。同時に飛び込む刺のある言葉。しかしその台詞を発するのには少々幼過ぎる声だ。正面には由加里の部屋の扉が見えている。声は下から聞こえてきた。視線を落とすと、私を見上げている愛くるしい顔があった。精一杯不機嫌な表情をしているが、それでも愛くるしさを失わないその少女は、パフスリーブの純白のボレロ、裾が2段のフリルになっている淡いピンクのスカートという歳に見合った幼い姿をしていた。色素の薄く緩いくせつ毛は艶やかに輝いて、まばゆいほどの若さが感じられる。そのふっくらとした頬を更に膨らませ、大きく黒い瞳に射止められた私は、意図せず口角を緩ませていた。

「何がおかしいのかしら？」

「あ、いえ」

大人びた口調で咎められ、すぐに顔を引き締める。ベッドからつかつかとやってきた榎尾が、私の横に並んで少女を見下ろした。

「おやおや、こんな小さなお客様だとは思わなかった」

「どちらが探偵さん？ それから、子ども扱いはやめてくださる？」

その物言いに探偵はわざとらしく驚いた顔を見せたが、やがてその吊り目を細めると、恭しく頭を下げた。

「これは、大変失礼いたしました。何せ女性との交流をあまり持たない人間なものでして。探偵は僕です。こっちの地味男は成沢亨輔僕の助手でして、面白くない本を書くのだけが趣味なやつです」

またこの探偵は、こんな少女にまでそれを言うのか。しかし面白くないのは自書が売れていないことから明らかなので、簡単に否定できないのが悔しい。

「あら、どんな小説をお書きになるの？」

「推理小説を……」

「ミステリをお書きになるのね！ 私、読書が大好きで特にミステリは格別に好きなの。綾瀬浩二の松戸芳一シリーズなんかは全て読みましたのよ。成沢さんは本名で書いていらっしやるのかしら。一度読んでみたいわ」

12歳くらいのその少女は、ミステリを書けば必ず賞を取ると言われている作家の名前を挙げた。そんな作家と比べたら、私の小説なんて足元に及ばないどころか比べられるのさえ恥ずかしいくらいの代物だ。評論家の先生方から悪評しかいただいたことがない。綾瀬浩二を読むこんな小さな女の子に出会ったのは初めてだ。

私はタイトルすら言えずに、ただ苦笑いを浮かべることしかできなかった。

「それで、貴方が榎尾冬也さんね。つい先ほど学校から帰宅したんですけど、私とお母様だけ尋問がまだのようですからこうしてお伺いしたのよ」

「お気を回していただきありがとうございます。それでは……そうだな、まずは貴女のお名前からお聞きしてもよろしいでしょうか」

榎尾の言葉に「あっ」と小さく声を上げると、少女の顔はみるみる赤くなった。

「私としたことが、申し遅れてすみません。松岡早苗といいます」
ペこりとお辞儀をすると、少女はちよつとはにかんでみせた。そしてこちらが質問をする前に、進んで口を開いた。

「私、15日は学校が終わったあと真っ直ぐ帰宅しました。確か……夕方の6時には家にいたかしら。お夕食をいただいて、7時頃に宿題をしなきゃと思ってお部屋へ戻りました。それから8時20分頃、お風呂に入ろうと1階へ降りましたら、玄関で華織さんを見か

けましたわ。急いでいたみたいだったので、声はかけなかったけれど。お風呂のあとはすぐベッドに入って、翌日は朝7時に登校しました」

早苗の証言にも、特に真新しい情報は含まれていなかった。

「早苗さんは、華織さんがお付き合ひしていた相手を聞いていませんでしたか？」

「特には。私、由加里さんと華織さんとはあまり……普段からお話しないので、よく分からないんです。あまりお役に立てなくてごめんなさいね」

「とんでもない！ 早苗さんは犯人じゃないと分かっただけでも十分ですよ」

早苗も信敏らと同様に確固たるアリバイはないのだが、榎尾はそういうと探偵用の微笑を向けた。まあ、まずこんなに小さい子どもが殺人を犯すはずはないだろう。

最後に「早く犯人を見つけてくださいね」と付け加えると、早苗は静かに扉を閉めて去っていく。少女がいなくなるとさっきまでの笑顔は何処へやら、榎尾は盛大に溜め息をついた。

「全く、この家は変わった人間ばかりだな！ 俄然面倒くさくなつたよ」

そう言いながら再び横になる榎尾とは反対に、私は衛藤家の個性ある住人たちを小説に登場させたら面白そうだ、などと悠長なことを考えていた。これがこの先に続く事件の序章に過ぎないとも知らず。

そのあとも仕事から帰った早苗の母（未亡人で松岡真子という。職業は歯科医師らしい）とも話をしたが、彼女の証言からも結局有力な情報は得られなかった。

3・身辺調査

目を開くと見知らぬ天井が飛び込んできて、此処が衛藤家の一室であることを暫く認識できなかった。

やっと昨日の記憶を呼び覚ますと、榎尾の姿を探した。しかし隣のベッドはもぬけの殻。1階の食堂にでもいるのだろうか。

ふと時計を見ると11時54分を指している。なんとということだ。もう昼じゃないか。探偵の助手という名目で此処に寝泊まりしているのに、これじゃ怠慢と思われてしまう。信敏の厳しい顔が脳裏をよぎって一気に覚醒する。

急いでベッドから跳ね起きて服を着替え階段を降りると、ちょうど玄関から屋敷へ入ってくるキクと会った。

「あら、おはようございます。よくお休みになれましたか？」

「あ……ええ……すみません、こんな時間まで。あの、榎尾は」

「探偵さんなら朝から外出されましたよ。華織さんの勤めていた幼稚園の場所を聞かれたので、多分そちらに」

榎尾は昨日のやる気のなさから一転、突如積極的に例の華織と会っていた人物を調べる気になったらしい。彼の気分は万華鏡のようにコロコロ変わる。ついていくこっちは大変だ。しかし起こしてくれたって良かっただろうに。

榎尾に置いて行かれたことに少し不機嫌になりながらも、階段下奥の扉から続く食堂へと足を運ぶ。後から入って来たキクが「すぐお昼の用意をしますね」と微笑みかけてキッチンへ消えた。

食堂の中央には長いテーブルが鎮座しており、左右に各5つずつ椅子が並んでいる。奥の誕生日席には他のものとは違う作りの豪華な椅子が1つ。そこが信敏の席であることは簡単に予測できた。

「成沢さん、今起きてきたの？」

「榎尾さんに置いて行かれちゃった？」

手前の席に向かい合って座る双子から声をかけられた。しかし昨

日とは違う服装のため、桜と楓の区別がつかない。今日はどちらもTシャツとデニムのハーフパンツに黒のレギンスというラフな出で立ち。違うのは髪を1つに束ねているシュシュの色がピンクかベージュか……根拠のない直感でピンクが桜だろうと当たりをつける。

「君たち、大学は？」

「2限までは真面目に受けたけど、榎尾さんとお話したくて早く帰ってきたのよ」

「だって探偵さんとお話する機会なんて滅多にないでしょう？でも榎尾さん、まだ帰ってきてないみたい」

「幼稚園に行っただって聞いたけど……」

「そうなの。幼稚園までは此処からそう遠くないから、すぐ帰ってくると思っていたのに」

もしかしたら何か手掛かりを見つけて移動しているのかもしれない。榎尾のあとを追うよりも、此処で待っていたほうが良さそうだ。

「隣いいかな、桜ちゃん」

「桜は私よ」

どうやら私の読みは外れていたらしい。けれど双子はどちらも楽しそうに笑っただけで、間違えたことを特に気にしていないようだ。

「しかし2人ともよく似ているね。格好まで一緒だから見分けがつかない」

おまけにどちらも暁美の美貌を受け継いでいる。

「仕方ないわ。大学の友達だっけしよっちゅう間違えるんですもの」「服も一緒なのはわざとなのよ。人に間違われるのが楽しくて」

「学部も同じだし、サークルも一緒なの。私たちだけ2人部屋で、趣味や食べ物の好みも大体同じ」

世の双子がどうかは知らないが、こんなに同じ尽くしの双子もそうはいないんじゃないだろうか。

「でも同じ人を好きになっけたりしたら取り合いになるな」

「取り合っけたりしないわ。3人で付き合えばいいの。どちらかを選んでどちらかが傷つくなんて不公平よ」

楓のほうさがさらりとすごいことを言う。桜も異議はないらしく数度頷く。2人に見初められた男はさぞ大変……に良い思いができることだろう。

「ねえ、そんなことより成沢さんのお話を聞かせて」

「推理小説をお書きになるんですってね。早苗ちゃんから聞いたわ」「作家さんってやつぱり儲かるの？」

「うちよりずっと大きなお家に住んでるんでしょうね」

あまり話したくない方向に話題がいく。4つの大きな瞳に見つめられて、私は少しのけ反った。この双子も例に漏れず作家イコール金持ちというイメージを抱いているらしい。

印税でがっぱり稼いでいるんだろう、なんて知人によく言われるが、全ての作家がそうとは限らない。本が売れて増版されればそれだけ印税も貰えるが、少数の初版すら捌ききれない私のような作家の収入など、たかが知れている。その辺のサラリーマンのほうがつと稼いでいるはずだ。もちろん家は安いボロアパートである。

それもこれも私が本を書いていることをあの探偵が暴露したせいだ。今となっては後の祭りだが。帰ってきたら文句の1つでも言うてやろう。

私がどう説明しようかまごついてる間に、キクが食事を持ってきた。素晴らしいタイミング。ほぼ同時に由加里もやってくる。

「あら、貴方いらっしやったのね」と素っ気なく言う私の正面、桜の隣に腰を下ろした。昨日のことがまだ尾を引いているのだろうか。榎尾不在の今、私に矛先が向くのは仕方のないことかもしれないが。

衛藤由加里は暁美や双子とはまた違った美しさを持っている。目鼻立ちがはっきりとしており、一文字に結ばれた意志の強そうな唇や鋭く光る双眸などは、柔和な印象の母親より父親にそっくりだ。カメラを構える者とは皆こんな頑固そうなのだろうか。自らのポリシーや世界観を貫くためには必要な性質なのかもしれない。

「ところで、成沢さん」

食事に手をつけようとしているところへ突然名を呼ばれて、何か厭味を言われるのではと深読みしてしまい、私は静かに箸を置いた。顔を上げると由加里と目が合う。一瞬。私のほうがすぐに反らした。何となく彼女に対して苦手意識が生じている。

由加里のほうは私の挙動不審を無視して続ける。

「今日、もうすぐ祐輔さんが此処へくるけれど、構わないわよね。昨夜、電話で来てもらうようにお願いしたの。犯人はまだ見つかっていないし、自分の身は自分で守らなくてはいつまた香織姉さんのようになるか分からないですから」

「あ、はい。大丈夫だと思います」

曖昧な返事しかできなかった。此処を仕切るのは私ではなく榎尾の役目だ。昨日のうちに探偵に伝えてくれたら良かったのだが、彼女としては榎尾と顔を合わせづらいのだろう。当の本人は昨日由加里から言われたことなど、記憶から既に抹消している可能性が高いのだが。

しかし方が一、佐々木祐輔が犯人だったら……。不安が胸をよぎる。安易に外部の人間を招くのは得策ではない気がした。

だが私は、それを由加里に言う勇気を持ち合わせてはいなかった。そもそも根拠のない予感めいた考えなのだから、口にしたところで由加里は取り合わないだろう。何より今以上に機嫌を損ねて、徒に私たちへ対する不信感を煽ることは避けたい。私の逡巡をよそに、双子や由加里は他愛もない会話をしながら食事を進める。私は榎尾が早く戻ってこないかとそればかり考えて、あまり物が喉を通らなかつた。

食事を済ませると、私は双子の質問攻めから逃げるように食堂を出た。一旦部屋へ戻ってみるが、特にやることもない。持ってきていた文庫本を開いても内容が全く頭に入っていないので、読書を諦めて事件について考えてみることにした。

もし犯人が衛藤家以外の人間だとしたら、これは榎尾が戻ってから調査の結果を聞かなければ全く予測がつかない。今の段階では、由加里の恋人で信敏のアシスタントである佐々木祐輔が衛藤と最も親しいが、だからと言って彼を犯人だとする仮説を立てる材料すら整っていない。

なので今は、内部の人物による犯行が可能だったかを検討してみよう。

それぞれの証言を呼び起こし、整理する。やはり何度思い返しても確固たるアリバイを持った者は1人もいない。

まず、信敏の証言。彼は15日の夜は書斎から殆ど出ることなく朝を迎えている。昨日皆の証言が出揃ったあと、それらの裏付けを求めてキクに話を聞いたが、信敏は夕食を取ったあとすぐに食堂を出て階段を上がって行ったらしい。しかし彼が書斎へ入るのを見た者は誰もいない。そして9時に就寝。

続いて暁美だが、彼女もまた信敏と同様アリバイはない。キクによると信敏が食堂を出て暫くしてから暁美も退席し、階段を上がって行った。8時20分に華織が部屋を訪れるが、食堂を辞したあとの暁美を見た者は華織以外にいないということになる。就寝時間はつきりしていない。本を読んでいていつの間にか眠っていたそう

だ。
そして由加里。彼女は夜10時30分まで佐々木祐輔と会っていた。車で自宅へ送られたあとは華織が発見されるまで部屋から出た。15日の夜は由加里が唯一身内と顔を合わせていないということになる。

桜と楓は9時に帰宅。2人は玄関でキクに出迎えられている。その後、桜は殆ど部屋から出ていないが、深夜に楓が1階のトイレへ向かう途中、2階でシャッターの音を聞いている。仮にこれは犯人が華織の部屋で何かを撮影……あまり考えたくないことだが、死体を撮影していたとしたら、カメラを所持している人物が怪しいと言える。この家でカメラを持っているのは信敏と由加里だ。この2人

の犯行と見せ掛けるための偽装、は有り得ないだろう。シャツター音なんて眠りを妨げるほどの音ではないし、夜中に誰かが2階を通過するかどうかなんて予め予測できることではないのだから。

それから次女の松岡真子は、9時半に仕事から戻りそのまま3階の自室へ入ると、疲れからすぐに眠ったと証言していた。朝5時まで一度も目を覚まさなかつたし、不審な物音も聞かなかつたという。

真子の一人娘である早苗は……いや、彼女には人を殺すことは無理だろう。推理時は確かにあらゆる可能性を考慮しなければならぬが、あの少女に大人の女性を、それも刃物で殺害する力はないだろう。おまけに華織はピアノの上に横たわっていたのだ。何とか引きずりながら成し遂げたとしても、ピアノにべつたりと血液が付着したはず。……待てよ。ピアノには不自然にも血痕が残っていないかつたときクが証言していた。まさか痕跡を消すために拭き取った？

だが、ではどう殺したのだ。華織が帰宅するのを待つて、部屋で殺害した？ 睡眠薬の入った飲み物を与えて眠っている隙に床で腹部をめつた刺し。出血多量で息絶えた華織を、椅子を台にして引きずりながらピアノの上へ運ぶ。可能かもしれない。しかし頭で考えるほど簡単に出来ることではないし、それなら他の人物、特に信敏のほうがかつと上手く成し得るではないか。引きずつて血を拭き取つても警察が調べれば椅子やピアノの側面からルミノール反応が出るはずで、あまり意味はない。それに何も早苗を無理して犯人に仕立て上げることはない。意外性があつて小説のネタには使えそうだが。内部の人間を疑えば、信敏犯人説がより強固なものになつてくる。外で殺すのは無理だとしても、帰宅した華織を今考えたような方法で殺害するのは可能だ。眠っている華織をピアノに上げてからめつた刺しにすれば、ピアノ以外に血が付着することはないため、拭き取る手間が最小限に抑えられる。ああ、それならビニールでピアノを覆いその上で殺せば、ピアノを汚すこともないし後処理が楽じゃないか。なかなか上手い推理だ。これなら榎尾もまともに取り合つてくれるだろう。

もし私の推理が当たっていたら、探偵はどんな顔をするだろう。これを機に探偵に転職するのもいいかもしれない。物書きのほうは売れない、やる気が出ないの悪循環で今後成功する見込みもないし（そもそも売れないのは才能がないからなのだが、それを言うところまでの自分を否定してしまう気がするので敢えて言わないが）。

生面を開いた気になりニヤついていると、ふと窓の外に目が行った。私たちが宛がわれた3階のこの部屋からは裏庭が見下ろせる。手入れの行き届いた庭は芝が短く刈られており、ライラック、庭桜、金雀枝、シラユキケシなどが花を咲かせていた。そこに、誰かがしゃがみ込んでいる。後ろ姿ではあったが、それが誰かを察すると、私は部屋を出て階段を降りていた。

近づいても、彼女は一向に私に気づく気配がない。何をすることもなく、ただぼんやり地を見つめている。考え事だろうか。

そういえば昨日客間で話をしたときも、彼女はこんな様子だった。その憂い顔に思わず良からぬ妄想を働かせてしまったが……。

「暁美さん」

ゆつくりと、彼女は緩慢な所作で私の声に反応した。黒々とした深い闇を思わせる瞳に私を映す。日の下にいるからか、肌の白さがより際立って見える。もしかして具合が悪いのだろうか。慌てて「大丈夫ですか」と言い足すと、暁美は微笑んで頷いた。手を差し延べると華奢な左手が掌に乗る。ほっそりとした薬指に嵌まった指輪は今にも外れそうに、不安定に揺れた。さほど力を入れずに、彼女は静かに立ち上がる。

「少し、ぼんやりしていました」

掠れた声。事務所を訪れた時とは違って今日は化粧気がないが、それでもやはり彼女は美しかった。肌の質と目元には隠せない老いが滲み出ているが、そんなものは全く気にならないほどに。そして醸し出す妖艶な雰囲気も。もう少し歳が近ければ、彼女が独身だ

つたなら、私は沸き上がる衝動を抑え切れなかつたろう。

彼女の憂いの原因はやはり華織のことだろうか。

この家の人々は、身内が殺されているというのにあまり悲しんでいる様子が見受けられなかった。殺人犯に対する恐怖や怒りはあらわにしてもだ。私は祖父を亡くした時など数ヶ月はふさぎ込んでいたというのに。

まだ衛藤家との関わりが薄い私には彼らの内情など知る由もないが、何かが欠落している印象を直感的に感じずにはいられなかった。そんな中、暁美だけは世間一般的な感性を持ち合わせた、ただ唯一の人物だろう。この家の人々と接してみても足りないと感じたものを、彼女だけは持ち合わせているような気がした。

「3階から貴女を見掛けて……具合が悪いのかと思って」

彼女の元へ来たはいいが、特に話のネタを用意していなかった私は咄嗟にそう取り繕う。ただ衝動的に暁美に会いたくなっただけだが、人妻にそれを言っただけは間違いなく誤解される。滑らかに口が回らず嫌な汗が出た。

「暁美さんは、信敏さんとどういった経緯で出会ったんですか」

会話を終わらせまいと頭をフル回転させてやっと出てきた話題は、あまりに突飛で俗的で陳腐なものだった。すぐに自己嫌悪に陥る。何故もつと気の利いた言葉が出て来ないのか。確かに気になっていった話題ではあるが、それを尋ねるにしても、幾重にもクッションを重ねて探りつつその方面に話を持っていき、さりげなく、自然に聞き出すべきなのに。女性を前にするといつもこうだ。

話の飛躍に暁美は驚いたようだったが案外さらりと答えてくれた。「私は昔、ファッションモデルをやっていたんですけれど、何処で私を知ったのか、主人のほうから君を撮らせてほしいって依頼がありました。それが知り合っただけです。当時あの人は25歳でしたけど、その頃から既に業界では名のある写真家でした。私の方は全然売れていなかったものですから、そんな方から突然依頼されて、正直信じられませんでしたね。どうして私なんかをって」

「暁美さんの写真集かなんかの依頼だったんですか？」

「まさか。私じゃなくて主人の写真集です。デビューしてからちょうど5周年だったので、その記念の。30人のモデルや俳優を被写体にして“素颜”をテーマにしたものでした。中には有名な女優さんもいたんですよ」

「それからどういった経緯でお付き合いされたんですか？」

「撮影が終わって本が出版された頃に、主人から2人で会いたいと誘われたんです。それから何度か2人きりで会っているうちに気づいたらお付き合いしていて、気づいたら結婚していました。私は同時にモデルも辞めたんです。付き合い始めた頃から主人に辞めるように言われていましたし、何より赤ちゃんができてしまいましたから」

今の信敏からは想像も出来ないが、彼は相当暁美に入れ込んでいたらしい。

「随分情熱的だったんですね、信敏さんは」

「そう……ですね」

言葉の途中に不自然な間があった。暁美の表情が一瞬陰るのを、私は見逃さなかった。

一陣の風。植物の芳香が鼻をつく。ブラウンの髪が春の陽射しを受けて煌めきながら横に靡いた。

やがて風が止み髪をかき上げた暁美には、今しがた見せた哀愁の陰りはもうなかった。

「中に、入りませんか。コーヒーでも飲みましょう」

穏やかにそう言われて、私は無言で頷いた。

暁美は信敏を愛しているのだろうか。今も、昔も。私には彼女が自由を奪われ、衛藤という檻に幽閉されているように思えてならなかった。

食堂ではキクがキッチンの清掃をしているところだった。他の3

人は自室へ戻ったのだろう。

「掛けてお待ちください。コーヒーを煎れてきますから」

そう言つて暁美がキッチンへ向かう。するとおおよその一般家庭ではあまり耳にしない、鐘を鳴らしたような品のあるチャイムの音が響いた。榎尾が戻ってきたのかもしれない。玄関へ足を向けようとする、キッチンからキクが小走りに出てきたので「榎尾だつたら此処へ呼んでください」と呼び掛けて、私は昼食時と同じ席に腰掛けた。

キクが食堂から出ると、間髪入れずに激しく階段を踏み鳴らす音がした。それはどんどん近づいてきて、止んだと思つたらキクが何やら微笑みながら戻ってきた。

「誰だつたんですか？」

「出ようとしたら由加里さんが大急ぎで降りてきましたね。祐輔さんだから私が出るわ、とおっしゃったのでお邪魔にならないように引き返してきましたの」

そういえば恋人の佐々木祐輔を呼んだと言つていた。頭上からは不揃いな足音が4つ聞こえてくる。

「佐々木さんは、どんな人なんですか？」

「優しい方ですよ。由加里さんより2つ下で24歳なんですけど、とても謙虚で。由加里さんは少し……気の強い方ですから、お似合いのカップルだと思います」

「この家にはよく来られるんですか？」

「そうですね。月に4、5回はいらつしやるかしら。由加里さんに会いに来るのもありますけれど、旦那様とお仕事のお話をしに来たりもしますの」

「まだお付き合いを始めたばかりで、初々しくて見ていて微笑ましい2人なんですよ」

3つのコーヒーカップを乗せた銀盆を持つ暁美が付け加えた。湯気の立つそれを目の前に置かれると、香ばしい香りにほっと息をつく。

「吉野さんもいかがですか？ お掃除は休憩にして」

「ま、ありがとうございます」

「あの、付き合い始めたのはいつからなんですか？」

「確か……1ヶ月前くらいだったでしょうか」

暁美の言葉にキクがコーヒーを嚙りながら頷く。それから控えめな笑い声を上げると左手を口元に添えた。

「佐々木さん、此処で由加里さんに告白したんですけどね、すごく緊張してらして」

「あの時は佐々木さんと家族皆で食事をしていたんです。それまでは何でもない話をしていたんですけど佐々木さん、急に立ち上がって、由加里さんとお付き合いさせてください！ って、主人に向かって言うんですよ。皆ぼかんとした顔で佐々木さんを見てましたわでも主人はあの仏頂面を全く変えないで、そういうことは本人に聞けって」

衛藤家の面々が揃っている時に告白とは、とても勇気ある行動だ。もし失敗したら彼らの笑いのネタにされるのは明白なのに、よくやってのけたものだ。佐々木には由加里に告白を受けてもらえるという確信があったのかもしれない。でなければどこかが相当抜けているのか。

暁美とキクは暫く笑い合っていたが、不意にキクが短く声を上げてそれを断ち切ると、エプロンのポケットから一通の封筒を差し出した。

「すっかり忘れていました。午前中に郵便受けを見てみたら、奥様宛てに手紙がきていましたよ」

「私に？ 珍しいわ。どなたからかしら」

白い封筒の表には“衛藤暁美様”と印刷した文字で記されている。住所はない。裏も空白だ。暁美が封を丁寧に切る。何か……嫌な予感がする。

封を切り、中に収まっていたものを目にした暁美は、美しい顔をこれ以上なくくらいに歪ませて悲鳴を上げると、椅子から立ち上が

り数歩後ずさった。体を小刻みに震わせて、両手で口を覆ったまま硬直してしまう。

暁美の手からそれはこぼれ、はらりと宙を舞い、床に落ちる。それは一枚の写真だった。恐る恐る手に取ってそこに写ったものを見る。しかしあまりにも衝撃的なその画は、逆に私の視線を釘付けにした。

写っていたのはグランドピアノに仰向けに横たわった女性。アングルは真上からで、赤黒く染まった腹部が生々しく光に照らされている。引きの画であり鮮明ではないが、切り裂かれた腹からは内臓が出ているようだ。女性の表情は苦痛に歪み、開かれた唇からは舌がはみ出している。

「華織……」

上擦った声で暁美が娘を呼ぶ。目一杯に溜めた涙が一雫、頬を伝った。

「一体何処で油を売っていたんだ」

私は榎尾が戻ってくるなり、食いかからんばかりの勢いで問い詰めた。事情を知らない探偵は両手を肩のあたりまで挙げて首を竦めてみせてから、私を振り切るかのように早足で食堂へ直行した。

「いつまでも寝ている君と違って僕は忙しいんだ。華織さんの勤めていた幼稚園へ行っていたのさ。彼女の交友関係を探るためにね」

「それは聞いた。幼稚園は此処からそう遠くないらしいじゃないか」「幼稚園に行ったあと、そこから華織さんと親しかった友人を訪ね歩いてきたのさ。保育士の1人が彼女と同じ大学に通っていたらしくてね。それから途中、七瀬警部に電話して事件について聞いてみたけど、やはりこれは警部の担当じゃないみたいだ。何も情報は得られなかった。ただ警察は犯人の目星すらついていないということに分かったけれど」

「それで、華織さんと会っていた人物は分かったのか？」

せき立てるように尋ねると、榎尾は乱暴に椅子へ腰掛け、あからさまに不機嫌な様子で私を見上げた。

「何をそんなに力ツカしているんだい、君は。置いて行かれたのがそんなに不満だったか？ それなら謝るから、まずはこの哀れな労働者を落ち着かせてからにしてくれよ。吉野さん、水を一杯いただけますか」

「言えないのか？ その名誉ある労働が無駄に終わったからか？」
いつまでも言い渋る榎尾の神経をわざと逆なでしてやる。すると彼は勢いよく立ち上がり、私を正面から見下ろした。反動で荒々しい音を立てて椅子が倒れる。体軀は華奢だが、その長身で見下され鋭く吊った目で睨まれると少々の迫力を感じる。だが私も負けじと睨みを利かせた。

ほんの数秒の沈黙。何を言われても弾き返してやると思っていたが、榎尾は意外にもすんなり引き下がった。声を荒げることはいしないが、1つ舌打ちを残して倒れた椅子を起こすと、どっかりと腰掛けた。

「成沢くん。僕と君が此処で仲違いするのは良くない。何を苛立っているのか知らないが、穏やかに対話をしようじゃないか」

「お前がさつさと言わないからだろう」

「分かった。では正直に言おう。僕は朝からあちこち歩き回って聞き込みをしたが、納得のいく成果は得られなかった。君の言う通り、徒労に終わったのさ。僕から言うことはこれ以上ないよ。それで、次は君の怒りの理由を聞こうか」

ネクタイを緩めながらこちらを見上げる榎尾に一瞥をくれてから、私も隣に腰掛けるとあの写真を封筒ごと彼に渡す。榎尾は中の写真を見ると、息を飲み眉間にきつく皺を寄せて険しい表情になる。

「なんだ、これは」

「華織さんだよ。朝、暁美さん宛てに投函されていたそれを吉野さんが持つていて、君が戻る少し前に此処で彼女が開封した」

「宛先も差出人も書いていない……なら犯人が直接持つてきたのか。

恐怖を煽るため？ 警告？ 生殺与奪の権を誇示しているのか？
くだらない！」

下顎を頻りに上下させて親指を噛みながら榎尾は吠える。聞き込みの成果がなかったことと相まって相当ストレスが溜まっているらしい。

「本当に何の手掛かりもなかったのか？」

「残念ながら、何も。恋人がいたことは友人たちにも仄めかしたようだったけれど、それが誰なのか、どういった人なのかは全く漏らしていない。華織さんは相当口が堅かったらしいな。多くの女性は恋愛話となると饒舌になるものだが……他人に知られてはまずい相手だったのかもしれない。例えば不倫関係にあったとか」

ここでキクがおずおずやってきて、水を注いだグラスをテーブルへと置く。私たちが言い争いを始めてしまったためにタイミングを見計らっていたのだろう。変に気を遣わせてしまった。「すみません」と声をかけると苦笑いを返してそそくさとキッチンへ引っ込んでしまう。先に我を忘れて榎尾をけしかけたのは私のほうだったので、気が重かった。

榎尾はやつと運ばれてきた水を一気に飲み干すとキクの姿を目だけで追った。

「それで、暁美さんは」

「部屋に籠っているよ。相当ショックだったみたいだから」

「無理もない。ところで今屋敷には暁美さんと吉野さん以外にも誰かいるかい」

「双子と由加里さんが。ああ、それと、佐々木さんが来ている。由加里さんの恋人の」

「へえ。彼女の用心棒でもしに来たのかな」

「そうらしい。由加里さんが昨夜、佐々木さんへ電話で此処に来るよう頼んだみたいだから」

榎尾はふうん、と気のない返事をして、グラスの縁をなぞる。だいぶ落ち着いた彼は軽く伸びをすると、瞼を擦りつつ立ち上がった。

「夕食まで時間があるから、華織さんの部屋を見てくるよ。殺人犯の意図がどうであれ、当時の現場を見ていない僕らにとって、この写真は有益な情報の1つだしね」

榎尾は写真を封筒と一緒にポケットへ突っ込み食堂を後にする。腕時計に目を落とすと4時12分を指していた。榎尾について行っても推理の邪魔になりそうなので、部屋に戻ろうと私も彼へ続く。

食堂を出て螺旋階段を上がっていると、背後で扉の開く音がした。振り返ると信敏が、その大きな体を揺すりながら屋敷の中へ入ってくる。それからもう2人、見知らぬ男が信敏に中へ入るよう促されている。

私が玄関の3人に注意を向けていると、先を歩いていた榎尾もこちらへ引き返してきた。私を通り過ぎてそのまま玄関先へ向かうと両腕を広げて彼らを出迎える。まるで自らの家に客人を招くかのよう。

「これはこれは、今お戻りですか、信敏さん。おや、そちらのお方々は？」

「ああ、探偵さん、紹介しよう。こっちは私の元教え子で写真家の鶴川康二くんだ」

まず最初に紹介された人物は、ボサボサに乱れた髪を掻きながら、猫背をやや曲げて無愛想に会釈した。長く延びた前髪の奥に潜む灰色をした目はずっと下を向いており、私たちと視線が交わることはない。歳は……榎尾や私と同じくらいかもしれないが、延びるに任せた髪が顔を隠しているため、判別し難い。彼は荒れた唇からしゃがれ声で「鶴川です」とだけ言うと、それ以上は何も言わず、全てを拒絶するかのよう俯いてしまった。

すかさず榎尾が補足説明を求める。

「教え子というのは？」

「私は専門学校で講師もしておつてな。鶴川くんに教えていたのは8年も前だが、在学中からカメラの腕はなかなかだった。卒業してからもこうして交流している教え子は鶴川くんくらいだ」

人との関わり合いの一切を受け付けられないような空気を纏ってはい
るが、信敏とは案外長い付き合いのようだ。衛藤の人々以上に一癖
も二癖もある人物だという印象。

「それで、こっちは助手の佐々木だ。帰ってくると、ちょうどこい
つがうちの前に車を止めたところだったよ」

鶴川の隣に立つ青年は「佐々木祐輔です」と名乗ると、人当たりの
良い笑顔を浮かべてから一礼した。こちらは鶴川とは対称的に清
潔感溢れる好青年といった感じた。……いや、そんなことより。

「これはどういうことだ」

探偵も気がついたらしく、顎に手をやって佐々木を舐めるように
眺めたあと、不審な目をこちらに向けた。

「君は、佐々木さんはこの家に既にいると、さっき言っていないかつ
たかい」

「ああ……榎尾が戻るずっと前に訪ねてきて。佐々木さんだと言っ
て由加里さんが2階から駆け降りてきたらしいから、僕はてつきり
……」

「じゃあ、君はその訪問者を見ていないのか」

背筋を冷たいものが走った。端で聞いていた3人も不穏な空気を
読み取って、表情が険しくなる。佐々木の顔からは笑顔がすっかり
消えて困惑の色を濃くしていた。

「一体何のことですか？」

佐々木が言い終わらぬうちに、榎尾は駆け出した。私も次いで後
を追う。予感には既に確信へと変わっていた。

由加里の部屋の前へ来た榎尾はすぐに扉を開けようとノブへ手を
かけるが、途中でガチャ、と音を立てて阻まれる。

「鍵が……」

「由加里さん！ 榎尾です！ 此処を開けてください！」

榎尾は執拗に扉を叩くが、中からは何の返事も返ってこない。不
気味なほど静かだ。脳裏を華織の無惨な姿がよぎる。そして暁美の
涙が。

「これで開けてください！」

横から佐々木が腕を差し出す。榎尾はそこに握られた鍵を引つたくと、錠を解いて扉を開け放った。なだれ込むようにして5人が部屋へ入ると、その瞬間、不確定だった様々な可能性は収束してしまった。最悪の方向へと。

一拍おいてから、悲鳴とも笑い声とも取れる不可解な叫びが、部屋に響き渡る。

榎尾が私に向かって何事かを言っているが、脳は言葉の認識を拒否している。目の前の凄惨な光景に全ての意識が捕われ、指の先すら動かせない。

もう2度と生の活動を許されない体は、胸の下から下腹部にかけて赤に染まっていた。切り刻まれた部分からは大量の写真が、まるでそこから湧き出ているかのように重なり合って床へこぼれ落ちていく。

男が女の名を呼びながら奇怪な足取りで近づき、その場につづくまる。私はまるでリアルに感じられず、ただぼんやりと現実逃避を始める。

かくして悲劇は繰り返される。

4・第二の殺人

警察は通報から30分ほどで到着した。私たちは全員リビングルームに集められている。

リビングルームは玄関から向かって右手にある一室だ。奥には小さなカウンターがあり、カウンターの中には様々な種類のアルコールが棚に陳列されている。此処には大型のテレビもあり、普段は家族の憩いの場となっているのだろう。

しかし、今いる者の表情は皆暗い。あの信敏でさえもだ。

華織の時はその変わり果てた姿を見ることはなかったそうだが、今回彼は娘の死を直接目の当たりにしている。皆リビング中央のソファに座しているのに、信敏だけはカウンターの隅に縮こまってしまっていた。

丸めた背中からは、初対面時に見せていた貫禄などすっかり消え失せており見ていて痛ましい。同時に私は、その信敏の姿に微かな安堵を覚えていた。彼もやはり人の親なのだ。

一方暁美は、この部屋に来てからずっと宙に視線をさ迷わせている。

今はもう泣き枯らしてしまったようだが、重く腫れた瞼と頬に光る幾筋もの涙の跡が彼女の悲しみを如実に表している。

彼女の哀惜は、私などには到底計り知れない。暁美の力になりたと思うのに、私にできることなんて何一つない。暁美にかける言葉すら見当たらない。私はどこまでも無力だ。

2人とは対照的に、双子は悲壮に暮れることもなくただ無感情な面持ちで、落ち着き払った態度でこの場にいた。

この双子児は、私たちが由加里の部屋で大騒ぎをしている時、何事かと部屋の中を覗いていた。自室が同じ階だったので余計に気になったのだろう。遠巻きながら由加里の姿を見ていたはずだが、若い2人はまだ死への認識が甘いのか、取り乱すことなく沈黙と無

表情を守っていた。何を思っているのか全く読み取れない。少し不気味に感じる。

そして信敏と暁美以上に取り乱しているのが、佐々木祐輔だった。好青年の雰囲気は既に跡形もなく、今はただ小刻みに体を震わせ苦しげな嗚咽を漏らしていた。誰もが無言で黙っているせいで、彼の嗚咽はリビングルームによく響いた。それがさらに室内の空気を暗く澱ませている。

交際が始まってまだ1ヶ月。佐々木のほうが由加里に惚れ込んでいるようであったし、この悲しみよりは仕方ないだろう。

が、しかし。それが欺瞞ではないかと、疑いの目を彼に向けるのを、私は禁じ得なかった。

そもそも彼は榎尾が戻るずっと前にこの家を訪問しているはずだった。なのに実際は榎尾が戻ったあと、信敏と共にこの屋敷へやってきている。これは何を意味するか？

先の訪問者は、由加里と親しい別の人物だったか。この可能性は大いに有り得る。

そしてもう1つの可能性は、今言ったように思わせるための、佐々木の細工か。一度此処を訪問し由加里を殺したあと、誰にも会わぬよう注意しながら屋敷を出る。そして何食わぬ顔で再び訪れる。外で信敏と鉢合わせたというのも計算してのことかもしれない。彼にとつて有利な証言を得るために。

鶴川康二は此処へ集められてからずっと、ソファアに浅く腰掛け膝の上で両手を組んだ姿勢のまま、まるで石像のように固まっている。それが冷静からなのか放心からなのかは分からない。

もしかしたら謎の訪問者は鶴川だったのではないか、という考えが一瞬沸き上がる。だが、このうだつの上がない男を由加里が自室へ招くとは思えない。

家政婦のキクは、部屋の隅に佇んだままうなだれている。今回彼女は幸いにも死体発見者とはならなかったが、一週間前を思い出しているのだろうか。その顔は蒼白である。

視界の隅で紫煙が揺れる。榎尾はいつの間にか窓を開け放って、緩慢な所作で Peace を燻らせていた。彼の脳内では今、目まぐるしく様々な推理が駆け巡っているのだろうか。そうであってほしい。

「目星はついているのか」

重苦しい沈黙に耐えられなくなった私は、窓枠にもたれ庭を眺めている榎尾に小さく声をかけた。空では日が傾き始めており、夜の闇が静かに忍び寄ってきていた。

榎尾はちら、とこちらに視線を寄越すと、幾らか短くなった煙草を携帯灰皿へ押し込みながら「いや」と掠れた声で返した。

「まだ断言できるほどの答えは出せていないよ」

「それは、目星がついてるってことじゃないのか」

「ある程度は絞れているが……」

「誰だ」

「そんなに急かさなくてくれよ。成沢くん、この事件での君は何だかおかしいぞ。感情的になりすぎている」

「別におかしくなんか」

「もしかして君は、本当に……」

榎尾の言葉は続かなかった。

ノックもなしに扉が開かれ、入ってきたのは七瀬警部と、私たちとは面識のない警視だった。低身長で横に大きい七瀬警部とは違い、警視の体軀は少々痩せすぎと思われるほどで、いかにも不健康そうだ。分厚い黒縁眼鏡の向こうにある瞳と薄い唇に表れた明らかな不満は、私たちに向けられているような気がした。その証拠に、彼は入ってきてすぐ私と探偵を交互に見遣ると、小さく舌打ちをする。

「お待たせしました。皆さんこちらに集まっていただけですか」

七瀬警部のダミ声で皆が中央に集まる。私と榎尾以外が座るとソファは埋まってしまったため、仕方なく隅に控えた。

「衛藤の皆さんとは既にお会いしていますが、他の4名とは初めてですね。私は神奈川県警の揚野です。こちらの七瀬は今回から事件

を担当させることになりました。そちらの……探偵さんとも面識があるようでしたのですね」

“探偵”と言う声に陰が含まれている。揚野警視は完全に私たちを敵視しているようだ。当の榎尾は堂々とした態度を崩さない。衛藤から正式に依頼されているという事実があるためか余裕の表情だ。私と榎尾、佐々木、鶴川はそれぞれ名前と此処にいる経緯を簡単に説明する。説明が終わるとやっと話は本筋に入った。

「それでは、由加里さん発見に至る経緯をお話いただきたいのですが」

警視がそう切り出すと、第一発見者である5人は目だけで無言のやりとりをした。するとおもむろに榎尾が手を上げる。

「僭越ながら僕が説明いたしました。よろしいかな、揚野警視」探偵の介入を快く思っていない警視に対し、榎尾はわざと挑戦的に口角を上げ見下すような目で尋ねた。警視は一瞬嫌悪したように目を細めてから「どうぞ」とぞんざいに言い放つ。

「それでは、許可が下りましたのでお話します。僕は本日、朝から事件の調査のために外出してしまってます。帰ってきたのは4時を10分過ぎた頃でした。食堂で助手の成沢くんとはばらく雑談していると、信敏さんが佐々木さんと鶴川さんを引き連れて帰ってきたのです。しかし成沢くんが言うには、佐々木さんは僕が戻るずっと前から屋敷にいるらしいではないですか。華織さんのこともあり不審に思っていますね、すぐさま由加里さんの部屋へ行きましたが、鍵がかかっている。外から呼んでも返事がない。これはいよいよ嫌な予感がする。僕は小説に出てくる探偵がよくやるように体当たりして扉を破ろうかしら、なんて思っていると、なんと偶然にも佐々木さんが由加里さんの部屋の鍵を持っていたのです。これで僕らは肩を痛めることなく難無く入室を果たしたわけですが、残念なことに由加里さんは既に生を失い、冷たくなっていました」

探偵の証言は事実を簡潔に述べたものではあるが、客観性に欠くのと口調が無駄に芝居がかっている。彼は大勢の前で推理を披露す

る時なんかもこんな口ぶりだが、私はそのうち警視が怒り出すのではないかと気が気ではなかった。

「成沢さんは、4時以前に佐々木さんが此処へ来るのを見たんですか？」

「いえ、それは……」

私は食堂で暁美とキクと話していた時のことを説明した。誰かが家を訪問したこと、キクが出ようとすると由加里が2階から駆け降りてきたこと、昼に由加里から佐々木がやってくる旨を聞いていたので、訪問者が佐々木であると勘違いしていたこと。あとからキクが、彼女もその訪問者を見ていないことを補足した。

「桜さんと楓さんは」

「見ていません。私たち2階のお部屋にいましたけど、由加里姉様が1階へ降りていったのと、誰かと2階へ上がってきたのは足音で分かりました」

「でも、しばらくしてからまた出ていく足音がしたわ」

「それは、1人でしたか？」

「ええ」

まただ。未だ判明しない謎の第三者。華織と由加里のそれが同一人物かは分からないが、私には同じに思えてならなかった。そしてその人物こそが、非道なる殺人鬼であると。

「ちなみに、その誰かさんがやってきた時間は分かれますか」

「2時50分くらいでした。玄関まで行ったときに時計を見たので、キクの言に警視は納得したように数度頷く。由加里の死亡推定時刻と一致しているのだろうか。」

「由加里さんの部屋から人が出ていったのが何時だったか、桜さんと楓さん、お分かりですか」

「3時30分くらいじゃなかったかしら」

「その時は暁美さんと成沢さん、吉野さんはまだ食堂に？」

私たち3人は首を縦に振って肯定の意を表す。ちようど華織の写真を見た頃だろう。

「この家の食堂はちょうど階段の下に位置していますね。誰かが階段を降りてくるのに、お三方とも気がつかなかったんですか？」

「とても……それどころじゃなかったんです」

暁美が、苦しげに言葉を絞り出す。確かに、あまりのショックで訪問者がこの屋敷を去ったことには全く気がつかなかった。キクも同様らしく、俯いたまま何も言わない。

「それは一体どういことですか」

警視の眉間にきつく皺が寄る。隣で榎尾が溜息をつく気配。どうやらこの探偵は写真のことを警察に隠し通すつもりだったようだ。先ほど写真について言及しなかったのは、忘れていたのではなく意図してのことだったのか、とようやく気づく。狡猾な男だ。

しかし暁美の一言で、その思惑は潰えてしまった。そもそも事前を示し合わせていなかったのだから、露見するのも時間の問題だっただろう。

「写真が、送られてきたんです」

「写真？」

「華織の……」

やっとそこまで言うと、能面のように無表情だった暁美の顔はみるみる崩れていく。うう、と微かに唸ると両手で顔を覆い肩を小刻みに震わせて、しゃくりあげるのを必死に堪えていた。

憐れな夫人に対して質問を重ねるのを躊躇っているのか、揚野警視は頻りに眼鏡の位置を気にした。クールを装っているくせに女性の涙には案外弱いらしい。

榎尾には悪いが、代わりに私が暁美の言葉を継ぐ。

「今朝、暁美さん宛てに差出人不明、住所未記入で送られてきたんですよ。殺された華織さんを映した写真が」

「なるほど。それで、その写真というのは？」

私は榎尾に写真を提示するよう目で訴えた。彼は一度私を睨みつけてから、観念したようにポケットから封筒を取り出し、テーブルに放る。警視は封筒の中身を確認もせず「鑑識に」とだけ告げて

七瀬警部に手渡した。警部は立ち上がって外で控えていた刑事に何事を囁いてそれを託した。

「さて。それでは改めて今日1日の皆さんの行動を、順を追って説明していただきましょう。……ああ、榎尾くんと言ったか。君は結構だ」

いの一番に口を開こうとする榎尾を制すると、警視はまず信敏に説明を促した。

「今日は、午前中から都内のスタジオに籠っていた。ある歌手のジヤケット撮影の依頼があつてね。昼の1時に撮影を終えてから、別の仕事の打ち合わせのためにスタジオ近くの喫茶店へ移動した。そこで鶴川くんと合流したんだよ。彼もその仕事に携わっているから打ち合わせが終わったのは3時30分くらいだった。そのあとは鶴川くんと一緒にうちへ向かったよ」

すっかり憔悴した信敏は、早口にそれだけ言ってしまうと、拒絶の意を示すかのように頭を重くうなだれた。

前の事件と違い、今回の信敏にはそれなりにアリバイがある。私の信敏犯人説が瞬時に崩れ去った。

警視は次いで鶴川を名指しする。彼の声はしゃがれている上にはぼそぼそと口を小さく動かして喋るために聞き取りにくい。

「俺は……午後の打ち合わせまで自宅にいました。前の日に仕事で撮影した写真の修正とか、現像とか、してました。正午に家を出て……あとは先生の言った通りです」

七瀬警部が苛々した様子で右足を上下に揺すっている。彼はいかにも鶴川と合わなそうだと思った。彼自身もきつと苦手なタイプなのだろう。

「では、佐々木さんは」

彼は警視の声に、はっと顔を上げると、狼狽を隠そうともせずには震えた声で話し出す。

「僕は……今日は友人たちと会っていました。2年前まで芸能関係の専門学校に通っていて、彼らとはそのときからの付き合いなんです」

す。今、皆で展示会を企画しているんですけど、展示する写真の選考を、ある友人の家でやっていました。友人宅を出たのは2時からでした」

「ご友人の家から此処までは遠いんですか？」

「いえ……電車で30分くらいです」

「ほう。そういえば貴方、此処へ到着したのは4時頃だったそうですね。来るまでの間は何をしていたんですか？」

警視の眼光が鋭くなる。警部もずい、と身を乗り出した。

警視らのそんな様子から、自らが疑われていると察した佐々木は悲壮な表情から一変、その整った顔に怒りを漲らせるとテーブルを力任せに叩いて立ち上がった。

「まさか……僕が、僕が犯人だとも言うんですか?! 僕が由加里を殺したと?!」

暁美が小さく震えた。明らかな怯えの色で佐々木を見つめている。

「まあまあ、落ち着いて……」

「佐々木さん。貴方は何故、由加里さんの自室の鍵を持っていたんですか？」

警視が宥めるのを打ち消して、追い打ちをかけるように榎尾が問いただした。佐々木は警視から探偵へ矛先を変えると、必要以上の音量でがなり立てた。

「由加里から合鍵を貰っていたんですよ! 2人揃いのものが欲しいけど、指輪は恥ずかしいからって。鍵なら人目につかないから……でも僕じゃない! 僕はやってない!」

悲痛な叫びは虚しく部屋にこだまする。確かにそれだけで佐々木を犯人とすることはできない。しかし彼の証言を裏付ける人物も、もうこの世にはいないのだ。

「貴方が犯人だとは誰も言っていませんよ。ただ不明な点は1つずつ解消していかないと。真実に辿り着くためにはね。そこはご理解いただきたい。佐々木さんだけでなく、他の皆さんも」

榎尾はぐるりと室内を見渡したが、誰も彼と目を合わそうとはし

なかった。ただ揚野警視だけが、険しい表情で榎尾を見つめている。佐々木は小さく謝罪すると、力無くソファーに腰を落とした。

「榎尾くん、君は少し黙っていてくれるか」

ついに警視が不満をその口から吐き出す。ペースを乱されてやりにくいのだろう。私が警視の立場でも、きっと同じ反応をしたと思う。探偵と言えども、ただの一般民間人なのだから。

「これは失礼しました。ずっと気になっていたものですから」

「君らは、もうこれ以上事件に関わらないでくれ。こっちにはこっちのやり方がある。あんまり引つ掻き回されると捜査が進まない」

「お言葉ですがね、警視。僕の雇い主は貴方じゃなくて衛藤暁美さんだ。彼女が今すぐ帰れと言つのであれば僕も素直に退散しますからね」

警視は暁美に向き直る。暁美は先ほどよりも幾らか冷静さを取り戻していた。

「暁美さん。そもそも何故、探偵など雇ったんですか。私たちに任せてくださいればいいものを」

ふと、顔を上げた暁美は、その赤く充血した瞳に、榎尾を通り越して私を映した。

彼女は私に何を訴えているのか。事件を暴くのは私ではなくて榎尾のほうだ。探偵の力量を計りかねているのかもしれない。榎尾が本当に事件を解決へ導けるのかと。

だとしたら、私は自信を持って探偵が退けられるのを阻止せねばなるまい。一見ふざけた男だが、大小関わらず数々の事件を解決したのを、私はこの目で見てきたのだから。

私は毅然たる態度で暁美へ頷いてみせる。榎尾に任せておいて間違いはない。私自身も、そう信じて疑わなかった。

榎尾のほうは暁美がどう言おうと構わないといった様子で、飄々とした態度のままだ。いや、もしくは自分が帰されるなどは露聊かとも思っていないのかもしれない。その自信が一体どこからくるのか、一度本人に聞いてみたいものだ。

「榎尾さんへの依頼は……取り消しません。私はとにかく一刻も早く、犯人を捕まえて欲しいのです。そのためには尽くせる手を尽くしたい。だから……」

くだらないことで言い争うな、ということだろう。

皆神妙な面持ちをしている中で、榎尾は一人勝ち誇ったように腕を組み、にやりと笑った。

「そういうことですから、揚野警視。貴方は不本意かもしれませんが、此処は目的が同じ者同士、助け合おうじゃありませんか。そのためには情報を共有することが大切です。お互いに包み隠さずにね」
写真のことを隠そうとした張本人が言えることではないが、警察と手を取り合うのは賢明だ。

警視は苦虫を噛み潰したような顔でしばらく榎尾を睨んでいたが、諦めたように頷くと盛大に息を吐いた。

「まあ……君の活躍は七瀬くんを通して聞いているからな。いいだろう。ただし、くれぐれも我々の邪魔だけはしないでくれ」

「もちろんです。邪魔どころか、警察の力になることをお約束いたしましょう」

榎尾は右手を胸に当てて、仰々しく頭を下げた。またその仕種が警視を苛立たせたようだが、救世主などと宣わなかっただけマシだった。

「話を戻しましょう。桜さん、楓さん。それから暁美のお話がまだでしたね」

「私たち、2限までは大学で講義を受けていましたわ」

桜が警視の言葉に被せて答える。

「そのあとは真っ直ぐ帰宅して11時30分頃、家に着きました」
次は楓が。

彼女らはまるで示し合わせたように交互に語りだす。

「榎尾さんとお話したくて帰ってきたんだけど、朝に家を出たっきのようでしたから、私たち食堂で待っていたんです」

「でも榎尾さんの代わりに成沢さんが来ましたわ。0時くらいに」

「それから3人でお喋りしていたんです。あとから由加里姉様も降りてきて、4人で昼食を取りました」

「食事が終わると成沢さんも由加里姉様もまたお部屋に戻って行ったので、私たちも自室に帰りましたの」

「それからはお父様たちが由加里姉様のお部屋に入るまで、自室を出ていません」

2人は待機中の無表情が嘘のように、ハキハキと簡潔に、彼女らにとっての事実を述べた。まるで教師に名指しされて回答を述べる生徒のような口ぶりだ。

しかし何かこの場にそぐわない態度だと思わずにはいられない。その原因はやはりこの落ち着きようからだろう。双子は姉2人の死を一体どう捉えているのか。

「部屋では何をしていましたか？」

疑っているふうではなく、形式上といった感じで警視が問う。アライバイはないが、双子のどちらかがあのような残忍な仕事をやってのけたとは、私にも考えられない。双子が共犯であってもだ。この若い娘たちに、殺人を犯しておきながら拳動不審にならず、ここまで冷静な演技が果して出来るものだろうか。

「私はお昼寝をしていました」と桜。

「私は音楽を流しながら読書をしていました」と楓。

「先ほど言っていた足音以外に、何か不審な音は聞きませんでしたか」

「いいえ」と見事にはもったところで、双子への聴取が終わる。

「では、最後に暁美さん。貴女は食堂で例の写真を見たあとは、何を？」

「あのあとは……ショックで目眩がして、起きているのが辛かったものですから……すぐに3階の部屋へ戻って横になっていました。榎尾さんが私を呼びに来られるまで」

これで第二の殺人における登場人物の証言は出揃った。屋敷内の人物の中でアライバイが確かでないのが3人。桜と楓と暁美。この中

に非道なる殺人鬼が存在するのか、はたまた外部の人物による犯行なのか。私は後者であると、この時既に確信していた。

いや、この見解は、あるいは私の単なる願望だったのかもしれない。

一通りの尋問を終えてから、去り際の七瀬警部に榎尾は何か囁いて、一枚の紙切れを渡した。警視は二人のやり取りに気づかない。それを受け取った警部は素早く上着のポケットに押し込むと、何も言わず警視と共に去って行った。

「なんだ、あれは」

「此処の電話番号を教えたのさ。あとで捜査の結果を報告してもらうためにね。あのときはああ言ってたけれど、警視が素直に僕へ全ての情報を提供してくれるとは思えない」

「もしかして警部が突然捜査に加わったのは……」

「警察の協力を得て初めて、探偵の活躍は光るのさ」

実に爽やかに微笑んではいるが、また警部を脅しつけたことは想像に難くない。悪なのか、善なのか。たまにこの男のことが、よく分からなくなる。

警察が退散しても、すぐには誰も動こうとしなかった。

1度目の殺人で凶器が見つかっていないことからこうなることは予測できていたが、皆あまり深刻に事を把握していなかったのだろう。華織が殺害されてから1週間。その期間が衛藤の人々の心に隙を与えていた。

榎尾は再び窓に寄るとPeaceを1本くわえて火をつけた。特有のバニラの香りが鼻をつく。夕刻の風は先ほどより幾らか冷たくなっていた。

真子が早苗を連れ帰宅した頃には7時を過ぎていた。

「どうしたの」

食堂の光景に、真子が訝しがりながら誰にともなく尋ねる。

とりあえず食事をしようと皆で食堂に場所を変えたはいいが、尋

問前と同じ沈黙が部屋には満ちていた。本来なら客人を交えて楽しく語らいながらの食卓になるはずだったが、まるで言葉を発するのが罪とでも言うように、皆口をつぐんでいる。暁美は目の前の食事に手をつけようとすらしめない。

私もただ機械的に食物を咀嚼する運動を続けた。榎尾と双子だけが、平気な顔で箸を進ませている。

「悲しいことに、また起こってしまったんですよ。殺人がね」

真子の疑問には榎尾が答えた。

彼女は驚愕の顔で絶句し「誰が……」と苦しげに呟いた。傍らの

早苗が食堂を見渡して「由加里さんがいないわ」と母親に知らせた。

「華織の次は由加里が……何故……一体誰が……」

「まあ、かけたらどうです、お2人とも」

「榎尾さん、まだ犯人は分からないんですか」

席につきながら投げかけられる不満の声。2人も身内が殺されて真子も気が気じゃないようだ。自らを案じているというよりは、早苗のことを心配している様子だ。

当の早苗はあまり恐怖を感じているふうではないが。恐怖よりも犯人が見つからない苛立ちを、その目に湛えて榎尾を見ている。

「やっぱり現実の探偵さんってこんなものよね」

相変わらずのませた口ぶり。榎尾は聞こえないふりをした。早苗が愛読するという綾瀬浩二の著書に出てくる探偵は、確か推理の早さが売りだった。私はデビュー作しか読んだことがないが、トリックも犯人も奇抜さに欠けるし内容に深みが足りないと感じた覚えがある。

「不確かな見当なら、ついていないこともないです。しかしまだ確固たる証拠を掴んでいないので、その人物を今すぐ糾弾するのは難しいですが」

「その人物というのは……」

リビングルームでの私と同じく回答を急かす真子を片手で制すると、榎尾は首を左右に振った。

「まだ……まだです。まだその段階ではない。僕に少し時間をくれませんか。明日のこの時間には、皆さんの納得のいく推理を披露いたしましょう。それまでなるべく1歩もこの屋敷から出ないようにいいですね」

「俺たちは」

尋問を終えてからずっと黙りこくっていた鶴川が口を開く。俺たち、には佐々木も含まれているのだろう。

「当然、鶴川さんと佐々木さんにも此処にいてもらいます。この屋敷にはまだ空き部屋がありますね？ よろしい。ではそちらにお泊りいただいて。僕は今からちよつと外出しますけど、日付が変わるまでには戻ります。皆さんは自室にいてください。またいつ何が起こるか分かりませんから、しっかり施錠して。では」

いつの間にか食事を終えた榎尾は、勢いよく立ち上がり食堂をあとにする。扉が閉まるとまた静寂が舞い降りた。

気まずさを感じた私は残りの料理を一気に詰め込み、急いで榎尾のあとを追った。

「一体何処に行くつもりだ」

「君は此処に残ってくれ」

「いや、僕も行く」

玄関で靴紐を結んでいた榎尾は、手を止めてこちらを見上げた。

一瞬批難するような眼差しを見せたが、ゆっくりと立ち上がり正面から私と対峙する。今度は哀願するような表情。どこか白々しいのは、その表情が探偵お得意の演技だからだ。

「頼むよ、成沢くん。僕が留守の間、彼らを見張っていてほしいんだ」

だがそんなものに惑わされはしない。せめて彼が何を考えているのか、推測の一端でもいいから聞き出してやらないと気が済まなかった。

「見張るったって限度があるだろ。一人で全員の動きなんて把握しきれるものか」

「そうか…… そうだな、では男性陣に特に気をつけていてくれ」

「どうして？ 鶴川と佐々木と信敏の誰かが犯人なのか？」

「声大きい」

執拗に食い下がる私を強く咎めると、榎尾は頻りに私の背後、容疑者たちが集まった食堂を気にしながら、声を落として続ける。

「君は気づいていないかもしれないが、由加里の体には精液が付着していた」

「なんだって?!」

「静かに。通報してから警察がやってくるまでの間、僕は由加里の部屋と死体をざっと調べたんだ。そうしたら彼女の太股辺りにそれを見つけた。警察が帰ったあと七瀬警部から僕に電話があったろう。確認したら当たりだったよ。そしてこのことは他の人間に知らせるな、と釘を刺された」

食堂に集まる前、リビングルームの電話が鳴ったのを思い出す。

榎尾は1コールでそれに出て短くやりとりしていたが、やはりあれは七瀬警部からだったようだ。死亡推定時刻や指紋の有無などを教えていたのだろう。

この探偵は皆の前では証拠を掴んでいないと断言していたが、あれはフェイクだったのだ。「それじゃあ、もう犯人は分かったも同然じゃないか」

精液が検出されたのなら、血液型が判明するはずだ。

「そうでもないさ。由加里に付着した精液の血液型はA型だったが、鶴川、佐々木、信敏もA型なんだよ」

事実是我たちの味方ではなかった。日本人にはA型が多いのだから、この結果は仕方のないことかもしれないが。

榎尾は私が納得したと見ると、ぼんと肩に手を置いて満面の笑みを浮かべた。

「それじゃ頼んだよ、助手くん」

「待て待て、それで君は何処に行くんだい」

ドアノブに手をかけ出ていこうとする榎尾に同じ質問を投げる。

危うくはぐらかされるところだった。

「今日由加里を訪ねてきた人物に会いに行くのさ」

振り向かず左手を上げながらそれだけ言っと、榎尾は外へ足を踏み出す。

外はすっかり暗くなり、夜の支配が始まっていた。

私は一抹の不安を拭えず、とつくに閉ざされた扉をしばらく見つめていた。

5・密事

いやに静かだ。壁掛け時計が秒針を刻む音以外には、物音一つもない。

暗い夕食を終えると皆は部屋に退散していった。佐々木と鶴川は3階奥の部屋（私たちの部屋の隣とその向かいの空き部屋だ）を宛がわれている。

榎尾に容疑者たちの見張り役を仰せつかった私は（榎尾としては私を追い払うための口実にすぎなかつただろうが）、とりあえず食堂に待機していた。階段を降りるか上がる者があれば、此処なら足音が響くからよく分かる。

すぐまた殺人が起こるとは考え難いが、しかし起こらないとも限らない。しかも犯人は男だということが分かっているし、今此処には衛藤家と最も深い繋がりのある人間が2人もいる。榎尾は彼らの前では無能な探偵を演じていた。確かな証拠は見つかっていないと。

もし自分が犯人なら、と考えてみる。女性の腹を切り刻み、その行為に性的な興奮を覚えるような嗜好は私には理解できないが、警察も探偵も何ら証拠を掴んでいないのなら、更なる殺人を犯すことはせずに逃亡を謀るだろう。いや、逃げたりすればその時点で自らを犯人だと知らせてしまうことになるか。

それなら探偵が失脚するのを待つて、ほとぼりが冷めてから職を変え別の街へ引越すか。どちらにせよ、この街にはいつまでもいられない。私なら。

と、そこまで考えてみてから無謀なことだったと一人自嘲する。私のような小心者に、大胆不敵な殺人鬼の思考など慮ることはできないのだ。

二度も衛藤の娘が殺害され、凶器は未だ見つからない（刃物だろうとは推測できるが）。さすがに警察も屋敷の隅々まで調べ尽

くしているはずだから、キッチンの包丁などではないだろう。とするとうまいこと隠しているのか、もう既に破棄してしまったか。

凶器がまだ犯人の手の届くところにあるとすれば、3度目の殺人は行われるだろうか。次は一体誰が犠牲になる？ なぜ犯人は衛藤の娘を狙うのか？

考えれば考えるほど分からなくなる。思考の糸ががんじがらめに絡まって、何を考えているかも不明瞭になる。

気晴らしに屋敷内を見回ろうか。

時刻は9時40分。榎尾が屋敷を出てから2時間経っていた。

2階へ上がると、3階から降りて来る暁美と遭遇した。ふらふらと覚束ない足取りが危なっかしい。私に気付くと彼女は弱々しく微笑する。

「お部屋に戻られるんですか？」

「あ、いえ……由加里さんの部屋へ行こうかと」

探偵の無能な付き人とは思われたくない、というちんけなプライドが頭を擡げた。由加里の部屋へなど入る気もなかったが、一応探偵の助手として仕事をしているふうを装う。

「暁美さんは、何処へ？」

私が尋ね返すと彼女は表情を隠すかのように俯く。耳にかかっていた髪が、さらりと落ちた。

「少し……外の空気を吸いたくて。家の中は、なんだか息苦しいので……」

喘ぎ喘ぎ答える暁美は本当に呼吸がしづらそうだ。

「でも、外に出るのはお勧めしません」

「……いいんです」

何もかも全てを諦めたような声音だった。2人も娘が殺されて自棄になっているのか。この様子では自殺でもしかねない。

私は、よろめきながら階段を降りる暁美の背後に「僕もついて行

きます」とつい声をかけてしまう。言ったあとで拒絶されるのでは、と後悔したが彼女は拒絶もせず誘いもせず、ただ一度こちらを振り向いただけで何も言わなかった。

私は少し躊躇ったが、来るなど言われたわけではないので、そそくさと暁美のあとを追った。

いつ誰が狙われるか分からないのだから、女性1人は危ないから、と心の中で言い訳を呟きながら。

庭に佇む暁美を、数歩後ろから見守っている。何か近寄りたいたい雰囲気醸し出しているようで、それ以上は近づくことができないでいた。

4月とはいえ夜風はまだ肌寒い。何も羽織らず薄手のワンピースだけを身に纏う暁美は、先ほどから何度も腕を摩っている。私の上着を貸してやれたらいいのだが、生憎今は私もカジュアルシャツ1枚で何も羽織ってはいない。出てくる前に上着くらい取って来ればよかった。つくづく自分の鈍さを認識させられる。

「成沢さんは……」

不意に名前を呼ばれて、咄嗟に身を固くした。しかし暁美のほうは背を向けたまま続ける。

「成沢さんは、誰が犯人だと思いますか」

「え？ いや、僕には……」

分からない、とは直接口にできずに喉の奥に押し込めた。

暁美としては何気なく尋ねたつもりだったかもしれないが、私には自らの無能が露見したんじゃないかと思えなかった。酷い被害妄想だ。

「なんだかもう、止まらない気がしています。きっと、誰にも止められない」

静かだ。虫の声すらしない。ただ静かな闇の中に、暁美の言葉だけが浸透していく。それはやがて屋敷を覆い、蝕んで、真実となっ

てしまうのだろうか。

いや、そうならないために榎尾が呼ばれているのだ。彼ならきつと救ってくれる。衛藤を。暁美を。

彼女は自暴自棄からそんなことを口走っているのか。それとも。暁美さん。貴女は、何か知っているんじゃないですか？ もしくは何かを隠しているのでは？」

なぜそんなことを口走ったのかは自分でもよく分からなかった。ただ直感的にそう思った。

暁美は警察や探偵にも話していない、重大な何かを握っているのではないかと。衛藤に隠された秘密。それがこの夫人をより神秘的に見せている原因なのかもしれない。

私の読みは当たったのだろうか。しばらく何も言わずに黙ったままでいたが、やがて暁美はゆっくりとこちらに向き直った。

屋敷から漏れ出る微かな光に照らされてはいるが、表情はよく見えない。また泣いているだろうか。私は暁美が昼間に食堂で見せた笑顔を思い出した。彼女が私の前で本当に楽しそうに笑ったのは、あれきりだった。

あとは泣き顔か、悲しげな表情しか思い出せない。

また暁美の笑顔を見たい。自分に探偵の才能があれば、と凡庸な己を呪った。

「お母様！」

暁美の厚い唇がまさに開かれようとしたとき、頭上から澆刺な声がした。

振り向き、見上げると2階の開け放たれた窓から桜が…いや、楓か？

「そんなところで何をしているの？ あら、成沢さんもいらっしやるのね。……え、あ！ もしかして！」

後半は随分と演技の入った口調だった。思わせぶりに言葉を切ると、双子の片割れは俗っぽい笑みをこちらに向ける。

「何を……」

「ねえ、成沢さん！ 食堂でお話しましょうよ。私、退屈で仕方ないの」

弁解しようと言葉を紡ぐが、大声に掻き消されそれも叶わない。仕方なく「ああ」とだけ返すと再び暁美に視線を戻すが、彼女はまたこちらに背を向けてしまっていた。

「暁美さん」

「行ってあげてください。私はもう少し、此処にいます。姉を2人も失って、あの子たちも落ち込んでいるでしょうから」

双子は落ち込んでいるのだろうか。確かに事情聴取のときは、まるで人形のように感情を殺していたが、今はあれが嘘みたいに元気そうだ。

しかし母親である暁美がそう言うのなら、そうなのかもしれない。悲しみを隠すための空元気……か。あまりしっくりこなかった。

しかしこのまま此処にいても、きっと暁美はもう先ほどの問いに答えてはくれないだろう。

何か大切なことを聞きそびれたように思ったが、私はその思いを振り払うように、気まずい沈黙が流れ始めた庭を後にした。

玄関へ向かって一歩芝を踏みしめると、何処に潜んでいたのか、クビキリギリスが耳障りな声で鳴き始めた。

再び屋敷に戻ると、ちょうど佐々木と桜（庭では判別できなかったが、ベージュのシュシュをつけていた）が階段を降りてくるころだった。

佐々木は私に目もくれず、さっさとリビングルームへ行ってしまった。

「佐々木さん、精神的にかなり参ってるみたいね」

「彼は？」

「酒でも飲まないとやってられないって、さつき2階で会ったとき言っただけだわ。お父様にちゃんと許可をもらったのかしら」

佐々木のあとから1階に降りてきた桜は、固く閉ざされたリビン
グループへ同情の眼差しを向けた。その他人事のような言い方、態
度は、やはり落ち込んでいるようには見えない。心の底から悲しん
でいるなら、たとえ演技をしていても、少しは表情に悲壮感が滲み
出るものだが。

「さ、紅茶でも飲みながらお話ししましょ。あ、成沢さんは紅茶、大
丈夫だったかしら」

「ああ、紅茶も飲めるよ」

「華織姉様が紅茶党でしたから、うちには種類が沢山あるの。ダー
ジリン、アツサム、オレンジペコー、プリンス・オブ・ウェールズ、
ニルギリ、ウバ、バイカル、カラメル、カルチェラタン……」

桜は私の前を歩きながら紅茶の名前をスラスラと並べる。途中か
らは聞いたことのないものばかりで、まるで呪文を聞かされている
ようだ。

「君と同じでいいよ」

私はどちらかというところを好んで飲むため、紅茶のどの茶
葉がどういう味だとか、そういうことには全く疎い。

桜は手を打って「それならグランボアシエリにしましょ」と言う
とスキップでもしそうな軽快な足取りでキッチンへと姿を消した。

桜の異様なテンションの高さに少々面食らってしまった、私はしば
らくその場にぼんやりと突っ立っていた。

思い違いだろうか。元から明るい娘だとは感じていたが、今のこ
の状況下では少し異様だ。早苗は華織や由加里とはあまり親しく
なかったようだが、ひよっとすると双子も姉達との関係は良好でな
かったのかもしれない。

そう勝手に結論づけるが、根づいた違和感はそう簡単に拭い去る
ことはできなかった。

「おまちとおさま」

目の前に置かれた純白のティーカップから、バニラの優しい香りが漂う。ミルクが加えられており見た目からも甘そうだ。

「榎尾さんがPeaceを吸ってらしたでしょう。華織姉様もあれをよく吸ってしまって、この紅茶が煙草によく合うって言っていたのを思い出したの。どちらもバナラの味がするからって。私、煙草は吸わないしよく分からなかったけれど」

彼女なりに姉を憫んでいるのか。私はいつそ、先刻考えていた姉妹間の関係について聞いてみた。

「私達、姉様方の誰と関係が悪いつてことはなかったわ。だけど華織姉様とは特に仲が良かったかもしれない。真子姉様とは早苗ちゃんができてから、よく話すようになりました。由加里姉様には、昔からあまり親しくはしてもらえなかったけれど。双子だからっていつも一緒にいるのが気に食わないようなことは、一度言われたことがあるわ」

死人を悪く言うつもりはないが、由加里ならそういうことをズバズバと言いそうだと思った。生前の勝ち気で澄ました顔が脳裏をよぎる。

「だけど、兄弟や姉妹って割とそういうものですよ。うちは5人姉妹で皆成人していますから、いつまでも子どもの頃みたいにはいきません。大人になれば家族との交流も徐々に少なくなっていくですよ。全ての家族がそうとは言いませんけれどね。成沢さんは、兄弟はいらっしゃらないの？」

「いや、弟がいるよ」

「弟さんとは仲が良いんですか？」

「いや……」

私はぎこちなく笑って言葉を濁す。うちは兄弟間どころか家族間もあまり良好とは言えない。いや、ただ私一人だけが、両親や弟から疎まれていただけなのだが。

長男であるのに家業を継がず、小説家などという無謀な夢を追いかけて、家のことは弟に全て預け出てきてしまった。

家を出てからは実家から連絡が来ることはないし、こちらからすることもない。勘当を言い渡されたわけではないが、現状はそれに近い。

あまり他人に言えたような家庭事情ではない。何より私の恥部を晒すことになるので、桜の問いに対して詳細な説明を提示することはできなかった。

「まあ、家の事情は人それぞれですから」

そう言うと桜は静かに紅茶を啜る。十も年下の娘にフォローされてしまった。情けない。

「ところで、榎尾さんは何処へ行かれたのかしら」

グランボアシエリ・バナラを口を含みながら、私は榎尾の行き先を教えてもいいものか、一瞬迷った。

しかし犯人は男だということが分かっているのだから、桜に対してそこまで慎重になることもあるまい。

桜が殺人鬼とグルであったなら教えるわけにはいかないが、そうになると彼女といつも一緒にいる楓も怪しくなる。

真犯人と双子の3人が団結し、衛藤を抹殺しようとしている……とは考え難い。面白いストーリーではあるが、まずそこに至る動機がこの双子にあるとは思えない。

身内を殺すなんて非道な所業は、よっぽどの理由がなければ為せることではないし、事の真相を知るものが3人もいたなら必ずどこかでボロが出るはずだ。榎尾が2日もかけることなく事件は解決しただろう。

「誰にも言わないと約束するかい？」

「もちろんよ。私だって早く犯人が捕まってほしいと思ってますから」

そう言いつつも桜の表情は実に愉しそうだった。私の勿体振ったような前置きが彼女の好奇心に火をつけてしまったらしい。

探偵の秘密を共有できるというスリルに胸躍らせているのだろう。次に殺人犯の標的になるのは、桜自身であるかもしれないとい

うのに。

「由加里さんを訪ねてきた人物に会いに行ったらしいよ」

ソーサーの縁に描かれた薔薇をなぞりながら、私は低く答える。

桜がこちらに食い入るように耳を傾けているのが気配で分かるが、私はなるべく彼女を見ないようにした。

「今日うちに来た人ね。皆が佐々木さんだと思い込んでいた。その人が犯人なのかしら」

それは私も現段階ではまだ分からない。しかし華織が会っていた人物と由加里を訪問した人物がイコールで繋がれば、あるいはそうなるのだろう。

全ては榎尾の調べ次第だ。私はまた待つだけの格好になってしまったが、不思議と焦りや不安はない。明日の夜には全てが分かる。暁美の苦悩を取り除いてやれる。

その仕事を果たせるのが私でないのは少々残念だったが。

「そういえば楓さんは」

話が途切れて、私はやっと疑問に思っていたことを口にした。

「2階で眠ってます。話し相手がいなくなったところに成沢さんを見つけたの。お母様と何を話していたんですか？」

「あ、いや、何も……ただ、犯人は誰なのかを聞かれたけれどね。

僕には全く検討がつかないから、答えられなかった」

「本当に、分からないんですか？」

念を押すような聞き方に、私は居心地の悪さを覚える。桜は突如真剣な表情になると、私の顔をじっと見つめた。睨まれているわけではないが、妙な眼力を秘めた双眸に射止められると、強く圧迫されるような感覚に陥る。

桜の質問の意図はなんだ。私を非難しているのか？ しかし責め立てるような色は感じなかった。また、尋問のときに見せた、喜怒哀楽全てが排除されたような表情。不気味だと感じた、あの。

「どういう、意味かな？」

努めて冷静に尋ねて、ごまかすように微笑を浮かべてはみたが、

頬が引き攣っているのが自分でも分かった。

けれど桜のほうはその瞬間に小さく息を吐くと、先ほどまでの無表情が嘘のように、また明るい娘の顔に戻った。

「いいえ、ただの好奇心です。まあ、明日には榎尾さんが謎解きをしてくれるみたいだし、それまで楽しみにしてます」

桜は人当たりの良い笑顔を浮かべてはいるが、二度も彼女らの二面性を垣間見てしまったためか、なかなか釈然としない。

衛藤家は変わり者ばかりだと思っていたけれど、最も異様で最も欠落しているのは、桜と楓なのかもしれない。どこが、とは明確に指摘できないが、彼女らは他の誰よりも不明瞭なベールに包まれた存在のように思えた。

「さて、と。私、そろそろ2階に戻ります。もうこんな時間だし」
桜につられて時計に目をやると、もうすぐ10時30分を回ろうとしていた。榎尾は一体いつ戻るのだろうか。

「僕はまだ此処にいるよ。もうすぐ榎尾が帰ってくるかもしれないから」

「そうですか。お喋りに付き合ってくれてありがとうございます。あまり無理なさらないようにね」

そう言って立ち上がった桜は、軽く伸びをしてから食堂を去って行った。

桜が階段を上がっていく足音を聞きながら、カップに残った紅茶を飲み干す。

再び食堂に静寂が訪れると、不意に睡魔が襲ってきた。瞼を乱暴に擦ってみるが、一度認識してしまった眠気は解消されるどころか徐々に濃さを増していく。

部屋に戻って寝てしまおうか？　しかし寝ている間に殺人が起きてしまったらどうする。だが今日由加里を殺したばかりで、すぐまた犯行に及ぶだろうか？　佐々木はどうしているだろう。桜と会話している間に何も物音はしなかったから、まだリビングルームか。

暁美は？　あの憐れな夫人はちゃんと部屋に戻ったろうか。庭で暁

美は私に何を言おうとしたのだろう。やはりこの家には何か秘密が……？

次々と沸き上がる思考も、次第に途切れ途切れになっていく。いつの間にかテーブルに突っ伏してしまった私は、最後に暁美の流した大粒の涙を思い浮かべた。

あのとき、無理矢理にでも暁美に質問の答えを聞き出しておけば、事態は好転していただろうか。彼女を守ることができただろうか。遂にその機会は、もう二度と訪れることがなくなってしまった。

6・推理執行

「……おい、成沢くん！」

突然、後頭部に鈍い痛みが走る。訳が分からず上体を起こすと、ぼやけた視界の中に頭から爪先まで黒づくめの男が立っていた。

覚醒していくにつれて、意識を手放す前の事柄が少しずつ思い出されてくる。桜と食堂で雑談をしていて、彼女が退席したあとすぐに眠ってしまったのだ。

ズキズキと痛む頭を摩りながら、もう一度男を見る。やっとはっきりし始めた視界は、腕を組んでやたら不機嫌な探偵を映した。

「何をしているんだい、君は」

「……そっちこそ、いつの間に帰ってきたんだ？」

「今だよ、たつた今。そうしたら君、呑気に寝ているじゃないか。どうやら僕の言いつけは守れなかったみたいだね」

「……」

「11時40分だよ」

時間を確認しようと顔を上げると、すかさず榎尾の陰を含んだ声が飛んでくる。

「何故そんなに不機嫌なんだ。起きて君を出迎えなかったことに怒っているのか？」

そういえば昼間もこんなことがあったな。あのときは今と立場が逆だったが、やはり理由も分からず非難されるのはいい気がしない。そんな私の様子に呆れたように首を左右に振ると、榎尾は私の隣に腰掛ける。体はこちらに向けて、やけに真剣な面持ちで対峙した。怒りよりも、切羽詰まったような焦りの色が切れ長の目に濃く表れている。どんな難事件に遭遇しても余裕の態度を崩さない榎尾が、こんな表情をすることは滅多にない。

嫌な予感がした。

聞きたくない、聞いてはいけない事実が、今まさに彼の口から放

たれようとしている。そんな予感。思わず耳を塞ぎたくなるのを、僅かな理性で押し止めた。

「暁美が殺された」

殺された？

一瞬、彼が何を言っているのか分からなかった。

日本語だということは分かるのに、一語一語の意味を理解できない。認めてしまえば自分の中の何かが崩壊し、自我を保てる自信がない。

そんな私の心情を知らない榎尾は、まるで死刑執行を言い渡すかのように無機質な低い声で続ける。

「さつき玄関から、庭に誰かが倒れているのが見えてね。確認したが、あれは間違いなく暁美だった。ざつと見たところ目立った外傷はなかったが、首に紐のようなもので絞められた跡があったから、絞殺で間違いない。今までは刺殺だったのに、何故今回は絞殺なのだろう。華織と由加里の殺害時に使った凶器は、もう処分してしまったということなのか……ということは、暁美殺しは犯人の計画に組み込まれていなかったということになるな。成沢くん、何処へ行くんだ」

最初の一言以外、私にはもう榎尾の言葉は届いていなかった。

とにかく庭へ行かなければ。

私は夢遊病者のように、力無く立ち上がる。だが背後の榎尾にすかさずそれを阻まれてしまった。肩を掴む手は力強く、この細い腕の何処からこんな力が出てくるのかと思われるほどであった。

「見に行くのはあまりお勧めしないな。じきに揚野警視らがやってくるから、それまで此処にいたほうがいい。僕は皆を呼んでくるから」

そう言っただけで榎尾は足を踏み鳴らしながら食堂を出、階段を駆け上がって行った。

2階で何やら騒いでいる声を聞きながら、私は榎尾の忠告に反して再び玄関へと足を向ける。

冷たくなつた暁美を見て自分がどうなつてしまふかとか、そういうことまで考えは及ばなかつた。彼女に一目会いたい。その願望だけにただ、突き動かされていた。

もはや靴を履くのも忘れて、数時間前まで暁美と2人きりでいた場所まで向かおうとする。

しかしその場所へたどり着く前、玄関から門へと続く石畳を右へ逸れて程なくして、彼女は見つかった。こちらに脚を向けて仰向けに倒れている。

見てはいけない。頭で警鐘が鳴る。しかし体は意に従わず歩を進める。一度釘付けになつた視線は、もう離すことができない。じわじわと背中に額に、嫌な汗が滲み出してきた。

榎尾の言つていた通り、暁美の体には首をぐるりと囲う紫色の紐の跡以外には、何処にも外傷は見当たらなかつた。

しかし彼女の美しかつた顔は鬱血して腫れ上がり、両の目は大きく見開かれ眼球が上向いていた。もがき苦しんだためか、シフォンのワンピースの裾が大きく捲れている。あらわになつた白い太股には死斑が表れ始めていて、その上をジグモがのそのそと這っていた。生前の面影など微塵も消え去ってしまった屍は、もはや暁美ではなかつた。

「ああ……」

これは悲しみだらうか。暁美の死を悔やみ涙するほど、私は彼女と時間を共にしていない。何か大事なものを壊してしまつたときのような、漠然とした喪失感に似ている。

それと、後悔。あのとき暁美は、私に何事かを告白しようとしていたはずだ。僅かに見せた意を決した表情は、忘れることができない。

あのとき無理にでも聞き出していれば。暁美を庭に1人残さなければ。こんな事態にはならなかつたはずなのに。

「ああ」

再度漏らした嘆息は音にならなかつた。濁り濺んだ空気を体外へ

吐き出したいののに、それは腹の底へ底へと重く溜まっていく。

止まらない。彼女の言わんとしていたことが、今やっと解った気がした。

「お母様！」

「お母様！」

静かだった闇夜を切り裂く二重の金切り声。視線を上げると、玄関からの光を背に双子がこちらに駆け寄って来る。しかし後から飛び出して来た榎尾が、すぐに2人の前に立ちはだかった。

「どうして……どうしてお母様が……」

双子の片割れが顔を覆ってその場に膝を折る。もう片方も、寄り添って頭を垂れる。榎尾が立たせようと彼女らの肩に触れるが、2人はしばらくそこから動こうとはしなかった。

ああ、あの双子でも泣くことがあるのか。姉達の死にも全く動じず感情の欠落した人形かと思っていたが、皮肉にも暁美の死によって双子はやっと人間らしい姿を取り戻していた。

放心から回復できないまま榎尾に促されてリビングルームへ入ると、真子と早苗、佐々木、鶴川が既に集まっていた。微かに漂うアルコールの匂いは佐々木から発せられている。カウンターにはワインの瓶が一本、空になって置かれている。突っ伏した佐々木はすっかり正体を無くしていた。

榎尾から事情を聞かされたのだろう。真子は俯いて啜り泣きを響かせている。幼いけれど聡明な早苗は事態を正確に把握しているようで、母の姿を見つめながらも表情に陰を落としていた。

そんな中で鶴川は、相変わらず陰気な雰囲気纏ってソファアの隅に座していた。少しは衝撃を受けているのか、目が落ち着きなく泳いでいる。

「信敏さんと吉野さんは」

榎尾が言いかけると、今しがた私たちが入ってきた扉からキクが

不安げな様子でやってきた。

「あの、旦那様がいらっしやらないんです」

「何処にも？」

「今、3階の書斎と寝室を見てきたんですけど……」

そこまで聞くと、榎尾はさっと身を翻してリビングルームを出ていった。私とキクも後に続く。

探偵は一気に3階まで上がると、片っ端から部屋を調べていった。次に2階。しかしどの部屋にも信敏はいない。1階の食堂と客間にも。

「まさか屋敷の外へ？」

「私も……そう考えて靴を見てみたのですが、旦那様のものは全て揃っていました」

「トイレと風呂場は」

「ああ、そういえばまだ確認していなかったな」

「それなら、リビングルームの奥の扉から……」
ここまでくると、最悪の可能性が頭をよぎる。キクと榎尾も同様のようで、狼狽と焦燥が2人の態度にも如実に表れていた。

「どうしたんですか？」

リビングルームを突っ切り、奥の扉へと慌ただしく移動する私たちに真子が震える声で問い掛けるが、それには誰も答ええない。

不穏な空気を察知したのか、ドアノブに手をかける頃には、真子と双子も榎尾の後に続いていた。

扉の先には細く短い廊下が伸びていた。左右に1つずつ扉がある。傍らに取り付けられたスイッチを入れると、間接照明が頼りない光を放つ。

榎尾はまず、左の扉を引き開けた。白い壁に囲まれたトイレであったが、明かりをつけずとも異常のないことは分かる。すぐに扉を閉めると、次は向かいの扉を。

「……信敏さん？」

扉の先は広い脱衣所だった。その奥の3枚引き戸式の浴室扉は固

く閉ざされている。シャワーから流れ出る水音がやけに大きく響く。曇りガラスの向こうには一瞬誰もいないように見えたが、よく見ると床に黒い固まりのような影。それは微動だにせず鎮座している。榎尾の呼び掛けにもまるで応えることなく。

しばらく私の前で静止していた榎尾だったが、やがてゆっくりと歩みを進めると、カラカラと軽い音を立てさせながら、その引き戸を開けた。

壁に掛けられたシャワーからは大量の湯が、床と横たわる死体に降り注いでいる。全裸のまま俯せになった死体の後頭部には、まるで失敗したスイカ割りのようにぱっくりと縦長の深い傷ができていた。湯と混ざった鮮血が排水溝へ吸い込まれていく。

「姉様！」

背後の声に振り向くと、楓が真子の体を支えていた。真子は立て続けに起きた惨劇にショックを受けたようで、気を失っている。

「吉野さん、姉様をお部屋に連れて行くから手伝って」

口を両手で覆い狼狽している様子のキクは、数度頷いてから楓と共に真子を両脇から支えながらその場を後にした。桜のほうも目一杯に涙を溜めて、両手を胸で固く握り締めたまま立ち去っていく。

私はもう一度、信敏の亡きがらに目を落とす。と、榎尾が自前である花柄の悪趣味な手袋を嵌めて、自らが濡れるのも構わず浴室へ入って行くところだった。

「まだ死後硬直が始まっていないな。死斑も点で表れているから、殺されて1時間と経っていないだろう」

信敏の体を淡々と調べ始める榎尾から、私は思わず目を逸らす。暁美にもこんなふうに触れたのかと思うと、軽い嫌悪感を覚える。そしてそんな自分に更に嫌悪した。彼としては仕事を遂行しているだけなのだから、仕方ないとは分かっているのだけれど。やり場のない苛立ちを、つい彼にぶつけてしまいそうになる。

「昨日から外で何をしていたのか知らないが、また殺されてしまった。此処へ来て3人もだ。……大丈夫なのか？　ちゃんと解決でき

るのか？」

「ああ、安心してくれ」

浴室にしゃがみ込んでいた榎尾は、場にそぐわない明朗な声でそう言い放つと急に立ち上がり、くるりところらに向き直る。その顔には自信に満ちた笑みを浮かべていた。

「もうすっかり分かってしまったよ。この僕の目を欺き、3度も殺人をやつてのけた犯人が一体誰なのか」

「本当か?!」

私の反応に、榎尾は誇らしげに大きく頷く。その偉そうな態度も今だけは頼もしく映った。一見ふざけた男だが、やはり彼が持つ探偵の才覚は確かなものだったのだ。

「警察が到着したら全て話そう。もうこれ以上、愚劣な殺人鬼に好き勝手にはさせないさ」

やっと終止符が打たれる。これで暁美も浮かばれることだろう。

そう思うと、さっきまでの投げやりだった気持ちが消え失せ、探偵への期待と尊敬の念が芽生え始めた。

「さて、お集まりの皆さん。僕は今日……いや、もう日付が変わっているから昨日か。昨日の時点では、まだ犯人の特定には至っておりませんでした。犯人を絞るにはあと少しだけ、情報が足りなかったのです。犯人特定に足る情報を得るため、昨夜僕がこの屋敷を出ている間、残念なことに更なる犠牲者を2人も出してしまいました……しかし皮肉にも彼らの死によって、僕はついに残虐非道な殺人犯の尻尾を掴んだのです！ 勝利を得たのです！ この手に！」

警察が屋敷へ到着すると、榎尾は揚野警視と七瀬警部を皆の集まるリビングルームへ迎え入れ、今まさに自身の推理を披露しようとしていた。気を取り戻した真子は未だ疲労困憊の様子で、部屋へ来てからずっと俯いている。他の面々も精神的に相当参っているようで、榎尾のふざけているとしか思えない演説にも何の文句も言わず、

ただ黙りこくっていた。

「御託はいいから話を進めろ」

そんな部屋の空気に痺れを切らした七瀬警部が野次を飛ばす。榎尾から一瞬逸れた警部の視線は、隣の揚野警視に向けられた。警視はこれ以上ないほどの不機嫌顔で、榎尾を凝視している。少しでも探偵の推理に穴があつたら突いてやるう、とでも考えているのだから。どうもこの警視からは、隙あらば榎尾を失脚させてやるうという魂胆が見え隠れする。今はそんなことをしている場合ではないのに。

「全く、せつかちですねえ。警察という人種は皆こんなのかな。慌てるど大事なものまで見落としてしまいますよ」

挑発的な物言いに警部がまた何か言いかけたが、探偵はそれを目で制すると大仰に両手を広げて言葉を続ける。

「今此処で犯人の名をずばり言ってしまうより、まず最初から順を追って事件の内容を整理していきましょうか。最初の事件は4月16日。衛藤華織さんが腹部をめった刺しにされ死亡しているのを16日午前9時頃、吉野さんが発見しました。死亡推定時刻は16日の午前0時から1時の間。華織さんは15日夜に暁美さんに出掛ける旨を伝えて屋敷を出ていたのに、いつの間にか自室へ戻って来ていた。亡きがらとして。この最初の事件を犯人はいとも周到にやっつけていたために、現場には犯人に直接的に繋がる物証は何一つ残されていませんでした。第一発見者である吉野さんの証言と華織さんの遺体写真を見て分かったことは、華織さんは自室でなく別の場所で殺されたということだけでした。ここで最も疑わしいのが、華織さんが夜に逢瀬を交わしていた人物です。僕は華織さんの交遊関係を色々と当たってみましたかね、この人物を探すにはなかなか骨が折れましたよ」

「ということは、それが誰か分かったのか」

昼間の榎尾の様子から、華織が会っていた人物の特定は諦めたものだと思っていたが、意外にも彼は根気よく聞き込みを続けていた

らしい。

探偵は軽快に指を鳴らすと「その通り！」と声を張り上げて実に嬉しそうに笑った。どうやら大袈裟じゃなく本当に苦労したようだ。けれど榎尾はすぐに表情を暗くして（といつてもこの変貌は随分芝居がかったのだが）盛大に溜め息をついた。

「しかしその人物は、この一連の事件の真犯人ではなかったのです。私は彼に話を聞くために自宅を訪問までしたんですがね」

「それは誰なんだ」

いつまでも勿体振って明言しない探偵に揚野警視が低く問う。口調は落ち着いているが、怒り心頭なのが表情からよく分かる。私は昨日の尋問時のようにまた肝を冷やす羽目になった。

榎尾もさっさと言っつてしまえばいいものを、顎に手を当てて何やら思案するそぶりを見せる。警視の眉がびくりと痙攣した。

「これは特に言う必要はないと思っつていたのですがね。警視に機嫌を損ねられたら敵わないので、教えて差し上げましょう。華織さんは15日の夜、彼女の勤めている幼稚園へ通う、あるお子さんの父親と会っつていたのですよ。しかし彼には夜11時以降確実なアリバイがあつた。奥さんに直接話を伺つたので間違いありません。嘘だと思つのならどうぞ調べてください。右京誠、30歳。自宅は幼稚園のすぐ脇に建つていゝる高級マンションの12階です。尤も、奥さんのほうがまだ家にいゝる保証はありませんが。僕が事情を説明すると彼女は実家に帰るとか何とか、ひどく喚いていましたから」

榎尾の話から察するに、華織はある父兄と不倫関係にあつたようだ。外部犯説を取るなら、華織の会つていた人物イコール由加里の訪問者イコール犯人とばかり考へていたために、この真実には少しばかり拍子抜けする。まさかその父兄が由加里とも関係を持つていたわけではあるまい。

「さて、それでは次に由加里さんの件です。彼女は3時から3時30分の間、に自室で華織さんと同様に刃物で腹部を切り刻まれ殺害されていゝた。この時もあざとい殺人鬼は、証拠を1つも残さず巧妙に

事を成し遂げてくれました。傷口には佐々木さんと由加里さんの写った写真が数枚挟込まれていましたが、指紋は検出されませんでした。そして由加里さんの時にもまた、怪しい第三者の介入がありましたね。その何者かが由加里さんを訪ねた時刻こそが、ちょうど彼女の死亡推定時刻と一致します。由加里さんが殺される前、佐々木さんが屋敷へやってくることをほのめかしていたため、成沢くんや他の屋敷にいた方々はそれを佐々木さんだと思い込んでいたようですが……」

「僕じゃないぞ！」

テーブルを強く叩いて佐々木が叫ぶ。酒が入っているため呂律が回っていない。彼は虚ろな目で探偵を睨みつけた。

榎尾はそんな佐々木の様子に露骨に顔を歪めると、蔑むような視線を返した。榎尾だけでなく双子と真子、早苗も汚らわしいものでも見るような目を、彼に向けている。

佐々木は衛藤家にとって家族同然であったはずなのに、この一件で彼に対する衛藤家の人々の評価は地に落ちてしまったようだ。

「異論は話が全て終わってからにしていたいただけますか。言い忘れましたが、由加里さんの遺体には精液が付着していました。このことから犯人が男性であることが確定したわけです。因みに血液型はA。この中にいる男性でA型なのは鶴川さんと佐々木さんですが、まだこの時点では謎の訪問者が犯人である可能性も生きている。由加里さんを訪ねたのは一体誰だったのか。その答えは意外にすぐ出てきました。彼女が自室へ容易に招くくらいに親しい人物と言えば、それはもう限られてきます。佐々木さんかご友人か、仕事の関係者、それも特に由加里さんと親しくしていたごく一部。僕はまず由加里さんの上司にあたる、写真家の矢城憲太郎氏に話を聞きに行きました。すると彼は正直に申し出てくれましたよ。3時近く、確かに由加里さんを訪ねにこの屋敷へやってきたとね。しかし矢城さんは届け物をしただけで、すぐに屋敷を後にしたそうです。因みに矢城さんの血液型はOでした」

これで訪問者の疑惑は解けた。同時に佐々木への疑いが濃くなる。しかし榎尾はここでも犯人を名指しせず、次いで暁美と信敏の事件に話を移す。

「そして最後に、昨夜の10時頃から11時40分にかけて暁美さんが庭で首を絞め殺され、信敏さんが浴室で頭を刺されて死亡していました。今回は今までと明らかに殺害方法が違う。このことから僕はまずこう考えました。おそらく華織さん、由加里さんの件は、前々から入念に計画を立てて実行に移した殺人だった。すなわち犯人は、それだけ確実にこの2人を殺したかった。もつと行ってしまえば、この2人だけを殺せばよかった。そのため犯人は由加里さんを殺害した時点で、早々に凶器を破棄してしまったのです。けれどもどうしたわけか、犯人は暁美さんと信敏さんも殺さなければならなくなる。どんな理由からかは知りませんが、2人が生きていると何か不都合があつたのでしょうか。例えば、暁美さんと信敏さんが犯人の正体に気づいてしまった、とかね。しかし皆さん、よく思い出してください。由加里さんが殺されたとき、暁美さんも信敏さんもひどく悲しみに暮れていました。そんな2人が犯人の正体に気づいたなら、真つ先に通報したはずです。しかしこの2人から警察への通報はありませんでしたし、信敏さんに至っては入浴中に殺害されたものと思われる。犯人に気づいていたなら、悠長に風呂など入っでいられるでしょうか？……このことから、僕は一連の事件の犯人を1人に絞ることをやめたのです」

「ということとは？」

一呼吸置いた榎尾に七瀬警部が先を促す。彼はすっかり榎尾の推理に聞き入っていた。いや、七瀬警部だけでなく、この部屋にいる誰もが真剣に探偵の言葉に耳を傾けている。揚野警視ですら、途中で口を挟むことをしない。それだけ榎尾の推理には隙がないということだろう。

「要するに、犯人は2人いるということなのです。華織さんと由加里さんを殺害した者と、暁美さんと信敏さんを殺害した者のね。と

ところで佐々木さん、貴方は華織さんが殺害された時間、何処にいらつしやいました？」

「どういうことですか」

佐々木の声が震えている。左足が忙しく上下し、何度も瞬きを繰り返す。酔いとは違う、明らかな狼狽。しかし榎尾は追及をやめない。弱り果てた害虫に留めを刺すように、佐々木の答えを待たずして容赦なく言葉を畳み掛ける。

「ご近所の方でね、偶然にも貴方を見ている人がいたんですよ。16日の夜0時頃、物影に隠れて屋敷の様子を伺っている貴方をね。貴方がよくこの屋敷を出入りしていたから、顔を覚えていたんだそうですよ。佐々木さん、そんな夜遅くに貴方、屋敷の外で何をしていたんですか？」

「それは……」

「華織さんの交遊関係を当たっているとき、僕はある事実を知ることになりました。佐々木さんが由加里さんと交際する前、それから交際し始めてからも、貴方は度々華織さんに言い寄っていたようですね。そのことを華織さんは、数人の友人に漏らしていました」

「まあ……」

真子が口に手を当てて小さく声を上げた。佐々木はまるで金魚のように口を開閉させるが、言い返す言葉が出てこない。酒で赤かった顔も今では血の気が引いて蒼白になっている。

「由加里さんのときも、おかしいと思っただ。貴方は合鍵を所持していた理由を尤もらしく述べていたけれど、いくら恋人だからって自室の合鍵なんて渡しますかね。しかも交際が始まってからまだ間もないのに。それに貴方には由加里さんが殺害された時間のアリバイがない。2時にご友人宅を出た後は、一体何をしていたんですか？ 矢城さんが去るのを外で待ってからすぐ入れ違いで此処へ来て、部屋で由加里さんを殺害したんじゃないですか？ 反論は無駄ですよ。由加里さんに付着していた精液と貴方のDNAを調べれば全てが露見するのですから」

「ちょっと……ちょっと待ってください！ 確かに由加里が殺された日の2時以降、僕の行動を裏付けてくれる人はいません。でも僕はただ、まっすぐ此処へは来ずに本屋に立ち寄りたりちよつとその辺をぶらついていただけで……3時から3時30分までに此処へは来ていませんよ！」

「佐々木さん」

佐々木の喚きを遮って、揚野警視が固く、諫めるような声で名を呼ぶ。瞬間、佐々木は助けを求めるような表情を見せたが、警視の鋭い眼力に気圧されて全身を凍りつかせた。

「お話は署で伺いましょう」

「そんな……！」

怒り、驚愕、憐れみ、侮蔑。負の感情全てを皆から浴びせかけられている佐々木は、頭を抱えてうずくまる。そんな彼に目もくれず、榎尾は次なる断罪へと取り掛かった。

「暁美さんと信敏さん殺しの犯人は、おそらく先の殺人犯に罪をなすりつけるつもりだったのでしよう。でなければ探偵と警察がこの屋敷を警戒している今、わざわざ殺人を行う必要性がありません。しかし夫婦は今までと全く異なる方法で殺されていた。このことから犯人は、華織さんと由加里さんが腹部を切り刻まれて殺されたという重要な共通点を知らなかったと考えられる。仮に知っていたとしても、適当な凶器を調達できず、やむなく今までとは違う方法で2人を殺害したか。どちらにせよ暁美さんと信敏さんを殺害した犯人は、この中にいるということになります。これを見てください」

探偵はおもむろにポケットから丸められた白いハンカチを取り出すと、皆が取り囲むテーブルの中央にそれを置き丁寧に開いた。中に包まれていたものは、樹脂でできたグレーの練りボタンだった。

「これは？」

「暁美さんの遺体のそばに落ちていました。おそらく暁美さんと揉み合った拍子にでも落ちたんでしょう。これと同じボタンがついたジャケットを着ているのは、鶴川さん、貴方だけなんですよ」

鶴川は榎尾の言葉にも特に動じた様子もなく、俯けていた顔をゆつくりと上げた。自身が犯人だと指摘されたにも関わらず、彼は少しも表情を変えない。その態度は諦めとも取れるし、全く見当違いのことを言われて呆れているふうにも見える。

「俺が、先生の奥さんを殺す動機がない」

「動機なんてどうだっていいんです。このボタンが庭に落ちていたことが、何よりも有力な証拠だ」

「じゃああなたは、俺が先生をどう殺したって言うんだ」

「そんなのは簡単なことです。暁美さんを庭で殺害した貴方は、その足で浴室へ行き、入浴中の信敏さんを背後から殺した。信敏さんの後頭部には深く長細い傷痕がありました。あれは庭の花壇に放置されたスコップで作られた傷です。脱衣所に少量の土が落ちていたので、すぐに分かりましたよ。僕は庭の花壇も調べてみましたがね、暁美さんの遺体があった場所付近の花壇に、凶器に使ったと思われるスコップがありました。先端に血がべったりついていたので、間違いありません」

榎尾が話終えると、場は時が止まったかのように静まり返った。

揚野警視の文句も飛んで来なければ、鶴川の弁明も聞こえてこない。不気味な静寂。

ただ皆揃って鶴川に視線を向けている。当の鶴川は、延びた前髪の間隙から湿っぽい目を探偵にだけ注いでいた。

と、不意に彼はさっと下を向くと、微かに肩を震わせ始めた。くつくつと堪えたような声は、徐々に低く呻くような音となってリビングルームに充満する。

早苗が母の腕にしがみつき、息を呑んで鶴川を凝視した。双子や真子も怯えきった様子で彼に注目する。

うす気味悪い笑い声はすぐに止んだ。しかし顔を上げた鶴川は、乾燥した唇を吊り上げ、グロテスクな笑みを張り付けていた。

7・失墜

じつとりと自らに絡みつく視線に、榎尾は明らかな嫌悪感を、その細く吊り上がった目元に表した。その相手が殺人という、人として最も犯してはならない大罪に手を染めた張本人であるために、彼の厭悪もひとしおであることが手に取るように分かる。

殺人犯と探偵は、しばらくそうして無言で睨み合っていた。

衛藤の娘たちも、揚野警視や七瀬警部でさえも、言葉を紡ぐのを忘れて成り行きを見守る、ただの傍観者となっていた。

そんな場の膠着した空気を先に打ち破ったのは、鶴川のほうだった。

「全く、素晴らしい推理だな、“迷”探偵さんよ。あんまりにも上手くこじつけるもんだから、俺も思わず首を縦に振るところだった」

「決定的な証拠を残しておいて、よくもそんなことが言えますね」

「俺は食事のあと3階に引っ込んでから1度も外に出ちゃいない」

「それを証明してくれる人はいるんですか？」

「いないな。だが、俺が部屋から出たことを証明する人間もいないはずだ。それに、佐々木は21時すぎに酒を飲むためリビングルームへ入って行ったそうじゃないか。浴室はリビングルームの奥にある。普通に考えりゃ、先生を殺すのに最も適した人物は佐々木以外にいない」

「何を言う！」

激昂した佐々木が立ち上がり、鶴川に掴みかかる。早苗が上げる、小さな悲鳴。胸倉を掴まれた鶴川は、佐々木を見据えながらも不気味な笑みを消さない。

「先生が憎かったんだろう。こいつはね、写真家として初めて開いた個展を、先生にぼろくそ言われたことがある。それも雑誌のインタビューで。赤っ恥をかかされたお前はその時から、先生に復讐してやろうと考えていたんじゃないのか？」

「ば、馬鹿なことを言うな！ 確かにあの時はショックを受けたし、悔しい思いもしたが……だからって殺そうなどと思ったことはない！」

榎尾は2人のやりとりを尻目に、壁に凭れてPeaceを口にくわえる。推理をすっかり披露して自らの役目を終えた彼は、事件にも衛藤にも興味が失せた様子で、緩慢に煙を吐き出す。

あとは警察の仕事だ、とでも言いたげな目を揚野警視に寄越すと、彼はやっと己の職務を思い出して激しく口論する2人の男に近づいた。

「お2人とも、それ以上は署で伺いますので……」

「警察はこんな男の狂言を信じるのか！」

今度は近寄る警視に怒鳴りつけると、佐々木は鶴川から手を離して榎尾に指を突き付けた。しかし彼とは正反対に、鶴川は諦めたように短く息を吐くと、ゆっくり立ち上がる。

「いいですよ。俺はこれっぽっちも疚しいところはありませんから。徹底的に調べてください。榎尾冬也とか言ったな。あんたの推理が的外れだっことを証明してやる」

苦しい捨て台詞のはずなのだが、鶴川の言葉に何故か胸がざわめく。榎尾の推理が間違ったことなど私の知る限り一度もないのだから、杞憂だと分かってはいるのだけれど。

榎尾の表情を盗み見る。彼には容疑者たちの言葉など全く耳に入っていないらしく、天井へ上っていく煙を無表情でぼんやり眺めていた。

ああ、いつも通りだ。自信と余裕があるからこそ、榎尾は鶴川の言葉などに揺り動かされたりしない。私は安堵する。やっと悲劇に終止符が打たれたのだと。

ただ、何か物足りない。何か、後味の悪さが尾を引いている。この場に衛藤暁美が生きて参加していれば、きっとこんな思いはせずに済んだかもしれない。

「もう遅いですし、今晚まで泊まっていつてくたさい」という真子の申し出に、私たちは甘えることにした。

私はそうでもないが、榎尾のほうは相当疲れが溜まっているらしく、ふらふらと部屋へ戻ると着替えもせずそのままベッドへ倒れ込んでしまう。彼が外でどれほど聞き込みをしたのかは知らないが、この様子だとかかなりあちこちへ歩き回ったのだろう。

程なくして規則的な寝息が聞こえてくる。部屋の電気を消して私もベッドへ潜り込むが、まだ興奮しているのか、なかなか寝つくことができない。

目を閉じる。なるべく何も考えないように。そう思っても、やはり暁美の記憶が次から次へと思い起こされて、息がしづらくなる。変わり果ててしまった暁美の姿は、きつと当分忘れることなどできない。

そこでふと、私の中である疑念が浮かび上がってきた。その疑念は考えれば考えるほどに大きく、重く、己にのしかかってくる。肌寒い夜のはずなのに、背中が徐々に汗で湿る。恐怖が、音もなく闇に溶けて部屋に充満し始める。

犯人は一体、何を使って暁美の首を絞めたのか？

鶴川が佐々木と共に連行される前、警部が2人の持ち物を調べていたが、彼らは特別凶器になりそうなものは持っていなかった。

とすると、暁美はこの家にあるもので絞殺されたことになる。死斑の様子から信敏と同様、暁美も死後1時間以内には発見されたようだから、犯人が凶器を破棄した可能性は極めて低い。

暁美の首についていた跡は意外と細いものだった。それでいてくつきりと赤く、肉に食い込んだ跡。縄なんてものはこの家にはない。タオルやカーテンなどの布製のものでもないだろう。

細く、それでいて頑丈なもの。

私の頭には、あるものが浮かんできた。しかしそれを使ったとなると、犯人は男では有り得ないことになってしまう。

だが、由加里に付着していた精液は犯人を男だと決定づける確固たる証拠だ。

何かを何処かで間違えているような、もどかしさ。

あの時、暁美が私に伝えようとしていたこと。それこそが、事件の真相を暴くのに重大な鍵である気がしてならない。

桜によって遮られなければ……。そういえば、あの時桜は何故、庭にいる私と暁美に気がついたのだろう。昼間ならまだしも、暗がりでは懐中電灯も使わず立っていた私たちを認めるには、じっと目を凝らして庭を見なければならぬはずだ。ふと庭に目がいつて私たちに気がついた、なんてことはまず有り得ない。とすると、桜は私たちが庭にいることを始めから知っていた、ということか。

どうやって？ 記憶を手繰ると、案外簡単に答えは出る。

私はあの時、2階で3階から降りてくる暁美と会った。外の空気を吸いたいという暁美に私はついて行ったが、庭に出るまでに私たちは誰ともすれ違ったりしなかった。

しかし、2階には双子の部屋がある。廊下での会話を桜に聞かれていたとしたら。

では何故、桜はあのタイミングで私たちに声をかけてきたのか。

あの時は何とも思わなかったが、今思い返してみるとどうも気にかかって仕方ない。あれは本当に偶然だったのか？

と、その時。

きい、と扉の蝶番が軋む音。それから微かな衣擦れの音。それは段々とこちらに近づいている。私は咄嗟に目を閉じた。

私と榎尾以外の息遣い。ノックも無しに、誰かがこの部屋へ侵入している。

薄く目を開けると、闇に慣れた視界に一際濃い影が映り込む。それは榎尾のベッドの前で止まると、しばらく彼をじっと見つめていた。

榎尾が危ない。

そう思うのに、声が出せない。恐怖で体が小刻みに震える。耳に届く息遣いが、徐々に荒くなる。

と、影がおもむろに両手を頭上へ振り上げた。窓から淡く差し込む月明かりに、それが一瞬煌めく。その瞬間、呪縛が解けた私はベッドから勢いよく飛び出して、影に自らの体を力の限り当てつけた。
「榎尾！」

床に2つの体が転がる。したたかに肩を打ち付けながらも探偵を呼ぶと、彼はやっとのそのそ起き上がる。なんて悠長なやつだろう！私はすかさず態勢を整えるが、影はくるりと背を向けて去っていく。ばたばたと階段を降りていく音。

「2階だ！」

部屋の電気をつけながら振り向かず榎尾に告げて、影のあとを追う。この時私は、先程までぼんやり考えていた憶測が当たってしまったことを確信していた。

2階へ下り廊下の明かりをつけると、床には点々と赤い染みが双子の部屋と華織の部屋を繋いでいた。私は一呼吸置いてから、迷わず華織の部屋へ続く扉を開く。やっと切迫した事態を把握して私に追いついた榎尾は、部屋の中を見て絶句した。

「桜……さん？」

まず目に飛び込んできたのは、ピアノの上に横たわる双子の片割れ。何度も切り裂かれたであろう腹部は真っ赤に染まり、華織の時とは違ってピアノまで血に塗れている。

そしてピアノの側には、真の殺人鬼がこちらに背を向け静かに佇んでいた。右手にはバタフライナイフを握り締め、両手とも肘の辺りまで真っ赤に濡れている。

「結局、最後まで見分けられなかったね、成沢さん」

彼女……いや、彼はそう言うところづくりこちらに向き直る。姿形はピアノの上の人物と全く同じだ。しかしその唇から発せられた声は、今まで聞いたことのない男の声だった。

「な、なんだ、これは……ど、どういう……なんで……」

榎尾は明らかに混乱していた。桜と楓の間で目を行ったり来たりさせながら、左手で自身の髪を強く掴む。「なんで……なんで……」とまるで讒言のように何度も繰り返す彼が、今に狂いださないかという気が気ではない。

「楓さん……全ては君が」

「そう。華織姉様も由加里姉様もお父様もお母様も。皆僕が1人で殺しました」

「どうして……」

私が問うと、楓は天井を仰いだ。うつとりと恍惚の表情を浮かべて。

「僕は、華織姉様を愛していました。5年前から、僕たちは愛し合っていました。小さい頃から女として育ってきた僕を、華織姉様だけは男として見てくれた」

「その格好は……君の意志でしていたことじゃないのか？」

「僕の意志なんて、この家に生まれた時から剥奪されています。小学校に上がるまでは母親の気まぐれで女の格好をさせられ、小学校に上がってからは桜に脅されて今まで……」

楓の視線はゆっくりと桜へ移動する。その瞳には憎しみの色など微塵もなく、慈愛に満ち溢れた優しさを宿していた。

「男の格好をしようとする僕に、桜は度々こう言いました。『双子なんだから全部一緒じゃなきゃ嫌よ。楓が男になったら私は死ぬわ』と。けれど僕は一度だけ桜の言いつけに背いて、長く伸ばした髪を切り、男子制服を着て学校へ行ったことがあります。そうしたらこの子は、自殺未遂を謀ったんです。手首を切って風呂場で倒れているところを吉野さんに発見されました。大事には至らなかつたけれど、見舞いに来た僕に桜は笑顔で、次は確実に死ぬからと告げました。恐ろしかった。」

当時は意味も分からず桜を恐れていたけれど、歳を重ねるにつれて僕にも桜の心が分かるようになってきました。だからと言って、

僕も同じように桜を愛することはできなかったけれど」

始めは強い独占欲だったのだろう。それが少しずつ歪んだ愛情へと変わっていき、楓をずっと苦しめてきた。

想像するのは簡単だが、私には桜の気持ちにも華織を愛した楓の気持ちにも、共感することはできない。

「その一方で、僕は華織姉様以外の家族から忌み嫌われる存在となっていました。母も父も、真子姉様も由加里姉様も、僕が男で女装していることを隠そうとする。僕の心など無視して、皆が女扱いをする。苦痛でしたよ。本当の僕なんて誰も見てくれやしない。でも、華織姉様だけは違った。華織姉様だけは、男である僕を受け入れてくれた。それなのに……」

ナイフを持つ手に力が籠っているのか、腕が小刻みに震えている。やがて楓は膝を折りその場にうずくまると、床に何度も何度もナイフを突き立てた。

「去年の12月から、急に華織姉様の態度が変わりました。僕を冷たくあしらうようになったんです。原因は、榎尾さんが突き止めた通り、父兄との不倫でした。僕は早い段階でそれに気づき、やめさせようと思いました。」

僕だって、いつかは華織姉様にもちゃんと好きな人ができて、この家を去ってしまうことくらい分かっていました。僕たちの関係にもいつかは終わりが来るって。だけど、不倫なんて……」

興奮からか、口調が早く、荒々しくなる。ナイフを突き立てたまま、じつと床を見つめて独白は続いた。声はより一層低く、憎悪の籠ったそれに変わる。

「許せなかった。そんな形で僕から離れようとする華織姉様が。右京の元へ嬉しそうに会いに行く華織姉様を見るたび、僕の中である感情が芽生えた。それはもう理性で押さえつけられないくらいに育ってしまった……それで」

「殺したのか」

楓はゆっくりと顔を上げて、私を見た。下ろした髪が汗で頬に張

りついている。私でなく、更に遠く、過去へ見据えられた瞳は、厭らしく濡れていた。桜に似た、暁美の面影を残した風貌は女にしか見えない、のに。

込み上がる吐き気を無理に堪える。

「あの夜、僕は華織姉様を説得しようとして、帰ってくるのを待つていました。もう不倫なんてやめてくれとか、僕がどれだけ華織姉様を愛しているかとか、とにかく必死に思いのたけを伝えました。

けれど華織姉様は僕の話の話を聞こうともしない。無言で浴室へ向かう華織姉様の後ろ姿を見て、僕は兼ねてから考えていた計画を実行する決意をしたのです。桜も他の家族も眠っている今なら、誰にも知られず事を成し遂げられると思いました。僕は一旦部屋に戻り、通販で買っておいたナイフを持って浴室へ行きました。浴室の扉を開けて、振り向いた華織姉様の腹に、迷わずナイフを刺し込みました。それからもう無我夢中で、よく覚えていません。気がついたら浴室は真っ赤に染まっていて、醜く顔を歪めた華織姉様が床に倒れていました。僕はその瞬間、何だかすごく嬉しくなった。あんなに優しくてあんなに美しかった華織姉様が、血まみれで、あられない姿で、目の前に転がっている。ずっと、ずっと、自分だけのものにしたかと思っていた華織姉様が。血はとめどなく流れ続けて、体温も徐々に失くなっていく。生きていた華織姉様も綺麗だったけど、あの夜ほど美しいと、愛しいと思つたことはない。

成沢さん。貴方に分かりますか？ 人の内臓に触れた時の感動が！ それも生涯で最も愛した女性の内臓。暖かくて、柔らかくて、心地好いぬめり。充滿する血液と撒き散らした汚物の匂い。あんなに、あんなに強いエクスタシーは、普通に生きていたんじゃないって決して味わえない。い、今思い出しても体が疼く。眩暈がする。僕は、僕はあの瞬間ほど、生きていて良かったと思つたことは、ない」

楓は自らの肩を抱き、体を小刻みに震わせた。感情が高ぶってうまく言葉が紡げないらしく、何度も吃る。

聞きたくもない悍ましい言葉の羅列は、私と榎尾を十分不快にさ

せた。

「落ち着いた僕は、華織姉様の体を拭ってあげてから、服を着せて靴も履かせて、部屋に担いで行きました。浴室も丹念に掃除しました。浴室で殺されているのが見つければ、身内が一番に怪しまれると思ったんです。僕と華織姉様の関係は家族の誰にも知られていませんでしたけど、身内が疑われれば僕の秘密もすぐに暴かれてしまいます。だからできるだけ、外部の人間による犯行に仕立て上げようと思いました。右京にアリバイがなければ完璧だったんですが」

「家族から君の秘密が暴露されるとは考えなかったのか？」

「それはまずないと思っていました。それを言うことは、衛藤の恥を世に晒すことになりますから。それに皆、身内に犯人がいるなんて露ほども思っていないませんでしたし。でも、お母様は違ったかもしれません。昨夜、成沢さんとお母様が一緒に庭にいるのを見て、僕は焦りました。お母様は何だか思い詰めた顔をしていたし、僕のことを話してしまうんじゃないかって。だからあの時、お母様に声をかけたんです」

「あれは君だったのか！」

気づかなかった。髪を纏めたシユシユの色で判別していたが、あれは楓が桜のものをつけていただけだったのだ。

「僕があの時“楓”で声をかけていけば、お母様は不審がって貴方に告白していたかもしれない。だから僕は“桜”に成り済ました。暗がりだったせいもあるか、お母様も僕を“桜”だと思っていたみたいでしたけど。そしてあの瞬間、僕は家族全員を殺そうと決めたんです。僕のことを明かされる前に。お母様はストッキングで首を絞めて、お父様は榎尾さんが言っていたように、スコップで。殺害方法を変えたのは、鶴川さんに罪を着せるためです。別に彼が憎かったわけではありません。ただ、たまたま鶴川さんのボタンを手に入れたから。食堂に落ちてたのを偶然見つけたんです。だけど、まさかあれだけで本当にごまかし通せるとは思っていませんでした。警察も、よく調べれば鶴川さんが犯人でないことくらい分かるでし

よう。でも、いいんです。僕は家族と、探偵の2人を始末する時間が欲しかっただけですから。……まあ、それも失敗に終わりましたけど」

「由加里さんを殺したのは……」

私が由加里の名を出すと、楓は、ああ、と実につまらなさそうな声を漏らした。

「あの人を殺したことに、特に理由はありませんよ。強いて言うなら、華織姉様を殺した時に味わったあの快楽を、もう一度体感したかっただけです。桜に睡眠薬入りの飲み物を飲ませてから由加里姉様の部屋へ忍び込んで、後ろから腕を回して首を絞めながら、腹目掛けてナイフを、こう」

楓は自らの両腕を動かしてジエスチャーしてみせる。悪びれもせず、むしろ愉しそうに犯行を暴露する楓を見ていると背筋を冷たいものが走る。

どうして、こうなってしまったのか。

彼がこの家に生を受けたその瞬間から、こうなる運命だったともいうのか。

くだらない。運命なんて一番嫌いな言葉だ。

「ああ、だから、佐々木さんが無実だったのもすぐ分かることだったんだ。決定的な証拠であるあの精液は、僕のなんだから！」

無気味な笑い声が、屋敷中に響き渡る。哄笑を続ける彼は、しかし目からとめどなく涙を流していた。己の所業を悔いて泣き、それをごまかすために笑っているのか。それとも本当に狂ってしまったのか。

やがてそれも止むと、楓はゆっくりと立ち上がり、再び優しい瞳で桜を見つめた。

「家族全員を殺すなんて言いましたけどね、桜を殺した時点で、もうどうでもよくなっちゃいました。僕の人生を縛りつけて歪めてくれたこの子を、僕は一番憎んでいた。でも、何故だろう。桜が息絶えた瞬間、僕の中には喪失感しか残らなかった。真子姉様や早苗ち

やんを手には掛ける気も失せてしまっ……」

話しながら、一步、一步、後退り、彼は窓のすぐ前で立ち止まった。右手にはバタフライナイフを持ったまま。

今まで気がつかなかったが、どうやら窓は片側だけ全開になっているらしく、そこから冷たい夜風が吹き込んでいた。

さらさらと横に流れる赤茶の髪。四角で囲まれた闇を背にして、俯き気味に佇む儂げな姿を、私は彼の母と重ねた。

「僕は、救われたのかな。桜に対する恐怖も、家族に対する憎悪も、今の僕にはない。そういう負の感情から解き放たれて、今はすごく、穏やかなんです。僕は……」

「しまった！」

突然叫んだ榎尾に、僕は一瞬気を取られた。榎尾が窓へ駆け寄るの目で追ったときには、もう楓はそこにいなかった。

榎尾は開いた窓から上半身を乗り出して下を確認すると、そのまま床に膝をつく。

私は、探偵の敗北をこの時、始めて目の当たりにした。

8・エピソード

衛藤家の事件から2週間、私は榎尾の事務所兼自宅に立ち寄りすることができなかつた。無論、彼のほうから私に連絡が来ることもなかつた。

楓が死んだあの夜、完全無欠と思っていた彼の虚しい背中を目にした私は、少なからず彼に失望していた。

私は勝手に榎尾冬也を完璧な男だと思い込み、多大な期待と尊敬を寄せていた。しかしそれらを全て裏切られたような気がして、自然と彼の元へ足が向かなかつたのだ。

けれど日が経つにつれ、流石に榎尾がどうしているのか気になつてくる。

もしかしたらまだふさぎ込んだままかもしれない。だとしたら、私は一体どう声をかけたらいいのだろう。いや、榎尾のことだからもう衛藤の事件などすっかり忘れて、暇そうにデスクでコーヒーを啜っていたそう。そしていつものように、大して面白くもない依頼をちまちまと片付ける。

私の頭には後者の情景が簡単に浮かんできた。いつまでも落ち込んだままの榎尾なんて、私には想像できない。

そう思うといくらか気が楽になった。一瞬でも榎尾を案じたことすら無駄だったなどと思えてくる。

木製の粗末な扉。何度も見てきた「榎尾私立探偵事務所」の文字。私はノックもせず、ノブに手をかけ扉を引き開ける。

しかしそこには、私の見慣れた風景はなかつた。

デスクも、汚いソファも、床に散乱していた資料やゴミの類もなく、代わりに沢山の段ボールが部屋を占領していた。

「やあ、君か」

榎尾冬也は段ボールの口をガムテープで閉めてから、こちらに向かつて手を挙げる。事務所にいるのに、彼は珍しく黒のスーツで身を包んでいた。しかし声に覇気はなく、顔も少し驚れているように見える。

「一体どういうことだ、これは……」

「うん、引越そうと思ってね」

「随分と急なんだな」

「まあね。ついでに探偵も辞めるよ」

引越しを告げると変わらぬトーンで、榎尾はとんでもないことを言い出した。

私は己の耳を疑い、すぐには反応することができない。

「先の事件で、僕は改めて思い知ったよ。自分がどれだけ探偵に向いてないかってね」

「そんな…… たった一度挫折しただけじゃないか」

榎尾は自嘲するような笑みを浮かべると、私から目を逸らして傍にある段ボールに腰を下ろした。

「確かに、僕の推理が外れたのはあれが初めてだった。でも、そのせいで何人犠牲を出した？ おまけに、今まで苦労して獲得してきた警察からの信頼も、地に落ちてしまった。そんな中でのうのうと探偵を続けられるほど、僕は図太くないんだ」

「じゃあ……これからどうするんだ」

「さあ、どうしようか。何も考えちゃいないよ。ただもう、此処にはいられない。いたくない」

そう言っつて榎尾は頭を垂れる。もう彼は、私の知る榎尾冬也ではなかった。

私は部屋へ入って彼に近づき、慰めの言葉をかけるべきなのに、それができない。

探偵でなくなった彼に、私はもうすっかり興味を失ってしまっていた。

私が事務所を出て行くこうとすると、榎尾は無言で手を挙げる。寂

しそつに微笑む彼を見ていられず、すぐに背を向ける。
私は一度も振り返ることなく、榎尾私立探偵事務所を後にした。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9846t/>

悦楽の儀式

2011年8月16日10時41分発行